

第10回銀華文学賞発表

銀華文学賞

当選

「加熱炉」波佐間義之（福岡県中間市）

特別賞

「凍裂」高岡啓次郎（北海道苫小牧市）

河林満賞

「梱包の方法」室町眞（東京都杉並区）

歴史小説特別賞

「鎮遠自沈ならず」

吉田満春（千葉県山武市）

※予選選考に当たり、小林広一氏、中野睦夫氏に多大な御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

銀華文学賞はおかげさまで一〇回目を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、フランスなど海外からの作品を含め、四一九篇という多数の御応募をいただきました。心から御礼申し上げます。
予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・都築隆広・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。昨年と同様歴史小説賞も継続させていただきました。
また御遺族の御厚意により河林満賞も併せて選出させていただきますました。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は五〇号以降に順次掲載させていただきます。

第一〇回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一四年一月二十五日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第一一回銀華文学賞も本年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

優秀賞

「1969年・理英子と」

竹内 清（愛知県刈谷市）

「雨の愛子」豊岡靖子（京都府長岡京市）

「負の気配」渋谷江津子（青森県弘前市）

「沖縄の叔母さん」

佐藤多美子（鳥取県米子市）

奨励賞

「幻想が生の実在を」佐山広平（愛知県春日井市）

「白富士病院」きなりかず（長野県松本市）

「熾火」椿山 滋（大分県中津市）

「父はひとりで」國方 學（愛知県名古屋市長屋市）

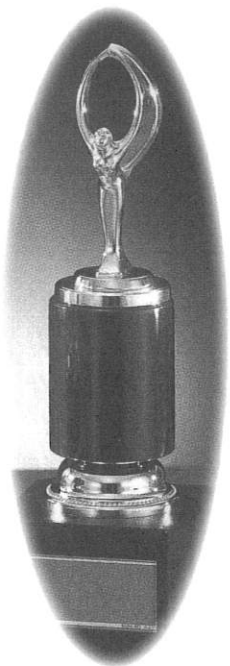
「さらさら とけい」出井孝子（滋賀県長浜市）

「獣魂碑」美里あきら（大阪府大阪市）

「平和公園の叢のかげで」梶川洋一郎（広島県広島市）
「ある遺書」原石寛（神奈川県横須賀市）
「眼科病室の患者たち」前岡光明（東京都町田市）
「罪」土岐田耕（大阪府豊中市）

歴史小説奨励賞

「アリラン恋歌」北見 舜（大阪府堺市）
「栗栖野」北条かおる（京都府京都市）
「東雲白むまで」伊野里健（千葉県白井市）
「水の中の笑い声」木山省二（東京都板橋区）



一〇周年を記念して当選作・特別賞作品・歴史小説特別賞は文芸思潮Eブックに電子出版させていただきます。

佳作

- 「GUITAR」 戸澤洋二
- 「折り目」 河津四方
- 「彼岸花」 宇和静樹
- 「安芸書林」にて」 木下訓成
- 「秋桜の咲く場所」 鴻江美和子
- 「われらしゃべり隊」 大隅 洋
- 「レモンの渴き」 坂上弘之
- 「蜜柑」 来の宮あんず
- 「鱗」 福野 泉
- 「スクール」 古林邦和
- 「夢先案内人」 冴樹悠也
- 「闖入者」 本松秀茂
- 「あの夏のあの日」 山崎文男
- 「ソウルで姉妹は見た」 栗山佳子
- 「宇治しぐれ」 小川ナツ
- 「生命の芽」 上田 勝
- 「何故の木」 横井直高
- 「紅雨」 井 美和子
- 「舎似道」 吉田宏子
- 「二十日鼠も少年も」 三村榮一郎
- 「ワンチャン・パトロール」 清水耕一
- 「未必の同意」 成瀬健太郎
- 「ひとつの風になれ」 古川サト
- 「二人旅」 飯島もとめ
- 「合作」 神通明美
- 「寒夜」 星野 透
- 「もちろんっその通りですが」 小野友貴枝
- 「動かない海」 関野みち子
- 「保釈」 窪川龍二
- 「草庵の恋」 牧 作樹
- 「父の日記」 中川一之
- 「結界」 川津圭介
- 「ぬけがら」 王峰
- 「遅い日没」 小林理樹
- 「いのちの記憶」 国方 勲
- 「手首の記憶」 木村令胡
- 「かたくりの花」 宮下ゆう希
- 「焼かれる処女嫁」 李耶シャンカール

選評

言語表現の完結性

小沢美智恵



候補作の審査をするにあたって、それぞれ個性のちがう小説家が論議しはじめると、その文学観の多様さに驚かされる。ある選考委員が満点をつけた作品を、他の委員はまったく認めないということもよくあり、なかなか意見の一致を見ない。最後は多数決にしようとしても、この文学賞は委員が六名と偶数で、賛否が真っ二つに分かれたりして難儀した。

その末での決定である。文学賞というのは、当選作が候補作の中で最良の作品だとはなかなか言えないものだが、今回はとくに最後まで決まらなかった。

紆余曲折して当選作となったのは、波佐間義之「加熱炉」である。製鉄所の現場にリアリティがあり、とりわけ「丸めたウエスのような物体」が溶鉱炉に落ちて、「ボンと弾ける音を立てたかと思うと煙とも蒸気ともつかぬ白いもの

歴史小説賞佳作

- 「遣唐大使 道真」 杉本敬治
- 「山梨の花」 大森耀平
- 「上山宿始末」 小笠原 新
- 「おそらく」 谷 光洋
- 「月照に会いたい」 興膳克彦
- 「日米和親条約」 白井 康
- 「永代橋異聞」 中川ひぐらし
- 「黒雲の天空」 笠置英昭
- 「遊び人の恋」 小竹康二
- 「太閤秀吉を討て」 春藤 弦
- 「芙蓉之間の忠臣」 久保協一

童話賞佳作

- 「イヤーチャップマンの小さな靴」 大川内聖二
- 「シューメーカー 靴の修繕やさん」 いまだまりこ

を激しく上昇させ、すぐに光線に同化するように消滅」する場面など緻密な描写でよく描かれている。ウエスと見えながらも実は人間で、それが事故なのか殺人なのか、謎を残したまま物語は進んでいくのだが、言葉だけで「本当らしさ」を積み上げていく前半の緊密さが、後半やや緩んでいるところが残念に思われた。が、作者は、製鉄所の労働環境を知らない読者にも、下手に自分のミスを認めれば一生浮かばれない組織の仕組みを納得させ、目の前に熱く溶けた鉄の塊を現出させた。これは言語表現が読者にもたらず内的体験だろう。

特別賞の高岡啓次郎「凍裂」は、仕事と家事と介護で疲れ切った主婦が、自分が通報したことで逮捕された無実の男のもとへ走る話である。徐々に凍りついていく主人公の内部が、ついに破裂する過程が無理なく描かれていて、鮮やかにタイトルと呼応した。候補作中いちばんのまとまりを見せた作品だが、無実の男がなぜ指名手配されながら何年も逃げていたのか等、ふと疑問にとらわれる箇所があって、作品の「本当らしさ」が損なわれる面があった。

河林満賞の室町眞「梱包の方法」は、父の不倫が心に影を落とし、いまだ人生を上手に過ごすための方法を見つけ出せずにいる「僕」が、文学青年だった十九歳の頃を思い出す話である。女友だち・茉莉とアルバイト先の黒メガネの店主が自分を求めていたにも拘らず応えられなかった苦

さを持ち続け、自分の生涯にわたる生きにくさがどこに端を発していたのかを探り当てる。

同じように文学青年（少女）だった過去の回想を核に主人公の人生を語る作品に、佐山広平「幻想が生の実在を」、丸山史「胸の洞」があった。いずれも力量ある作者で、作品そのものも悪くなかったが、話の「梱包」のしかたという点で室町氏に軍配が上がった。

それにしても、今回応募作を読んでまず思ったことは、回想ものが多いということだった。そもそもこの賞は、「人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当てたい」という思いから出発しているから、過去に目が向けられることは自然と言え言えるのだが、そこで留まっていた方がいいのかという思いがたえずした。

たとえば円地文子の名短編「花喰い姥」は、同じく文学少女だった主人公の回想を軸にしているが、高齢になり何もかもおぼろになった主人公の現在が幻想的作風で描かれ、作品内部の事象はいかに「事実」に似ていても、事実とは異なる次元に読者を誘い込む。そこには、単なる回想では終わらせないという作家の強い思いが感じられる。先の三作者も力量は充分にあるのだから、そのもう一歩先をと奮闘してほしい思いが残った。結果的にうまくいかなかったとしても、その意志が感じられるとき作品は輝くのではないだろうか。

優秀賞作品はそれぞれ傷もあったが、捨てがたい長所もあった。佐藤多美子「沖繩の叔母さん」は、叔母さんの正体を明かすタイミングが巧みで、かつその姿が生き生きと描かれていた。豊岡靖子「雨の愛子」は、レイプ被害の後遺症がトラウマになった過程に説得力があった。竹内清「1969年・理英子と」は、過激派から逃げてきた元恋人の身勝手さに魅力があった。渋谷江津子「負の気配」は主人公のあつけらんとした語り口がいいという委員がいた。

惜しくも優秀賞には残らなかったが、北条かおる「栗栖野」は、実生活の重みを見聞して己の空想の和歌を恥じ、山里にこもる男の話で、芸術観として考えさせるものがあった。

井出孝子「さらさら とけい」は、働き者の女の幸福な一生の物語で、関西弁のリズムが心地よく、語りが巧みであった。

きなりかず「白富士病院」は、身内に生きることを望まれている高年齢者を看取ることで、医師の胸にきざした命への想いが描かれており、高齢化社会の現代における優れて重い問題提起になっていると思われる。

木村令胡「手首の記憶」は、戦争中過酷な目に遭い、精神を病んで自死した従軍看護婦の話で、緊密な文章に迫力があり圧倒された。

小説の特徴はすべての表現が言語を通じてなされており、かつ言語をもって完結していることだろう。言語表現による完結性こそ、小説のもっとも本質的な要素だと私は思い、その点を重視したが、いかに書かれているかより何が書かれているかを重視する向きもあり、あらためて文学観の多様さを実感させられた。

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮

さらに高く、さらに貪欲に

五十嵐 勉

銀華文学賞も一〇回を重ねて、感慨深いものがある。延べ三五六四人という多くの方に応募していただいたことになる。これらの書き手に支えられて持続できたことに深く感謝したい。



一方で、書き手に対して、目標を提供し、発奮してもらおう成果は、それなりに役割を果たせた気もし、かなりの秀作の軌跡を残せた思いもするが、これが日本文学という大きな山脈の高峰に連なりうるものかという問いには、いささか躊躇を覚える。ただ一つ、自負できるとすれば、第五回の小林和太氏の「後ろ影のない男」が、そこに立ちうるもので、今回転載させてもらった「アブカサンベの母」に、そのいっそう高次の結晶を見る。一〇回の記念として、これも何かの縁と感じる。

しかし、名作、傑作がそう頻繁に出るものではなく、ましてこの文学貧困の商業誌と文壇の体たらくの現状の中では、はるかにましな頻度で秀作が出ていると見るべきだろう。その意味では、一〇回の年輪は、一つの重みを得たのかもしれない。もともと銀華文学賞の発意は、新人賞を若い書き手だけに偏らせ

入選

- 「二つの顔」 蘭 藍子
- 「磯」 岩井延次郎
- 「キー・ウエスト」 渡邊雅人
- 「斜陽の訪れ」 葛岡昭男
- 「夫婦にて候」 高杉治憲
- 「制服」 筑紫 茜
- 「満天の星空が見たい」 大槻武治
- 「山鳩の聞き做し」 大倉克己
- 「光楽寺」 藤川六十一
- 「整理戦線異状なし」 井上理博
- 「天売島の見合い」 田端祥子
- 「いまは恋しい、ケイという女」 佐山雄次
- 「カボチャ極楽」 喜多文秀
- 「父消える」 馬込太郎
- 「蓮城橋」 宮川英子
- 「胸の洞」 丸山 史
- 「邂逅」 天保英雅
- 「フェンスのない屋上」 大江純子
- 「歌うテネシーのじゅんちゃん」 中川ガバチャ
- 「フリーマントルの落日」 安良川健介
- 「切り火」 鈴木無一
- 「クローズド マインド」 長沼宏之
- 「夜光虫」 宮本辰夫
- 「一九七四年、或る画像」 マツイ アキラ
- 「初代国鉄総裁」 ヒミ子
- 「歩いてくる人」 柿沢正志

選評

ている悪傾向への反発であり、むしろ人生経験豊かな、厚みのある書き手に、実りある作品を提出してもらおうというものだった。それは半ば実現したが、半ば不満を残した。持続はしているものの文学的な野心に乏しい側面を、壮年層以上の多くの作家が露出していたからである。五〇枚という制限のなかでは期待するほうが無理なのは百も承知しているが、こちらとしては挑戦的野心や、既成の枠に対する破壊力を期待していたのも事実である。現在の一般誌の新人賞は若い世代でもさらに挑戦的野心は貧困で、破壊力などというものはかけ離れてせいぜい線香花火程度にしかならない現状は、もっと惨憺たる状況だと確かに言える。しかしだからこそ先に立つ世代の牽引力を見せてほしいと願望するのは、無理なのだろうか。学生運動で改革の夢に燃え、ベトナム戦争に反対して叫んだエネルギーは、一時の悪酔いや悪戯にすぎず、文学として結晶し残ることなくただ闇に消えていく無意味な騒ぎだったのだろうか、という疑念や虚しさも抑えることはできない。またそういうエネルギーに代わる立場の野心も存在しないのだろうか、とも思う。銀華文学賞には、さらに高くさらに貪欲に理想を求めていきたい。

第一〇回の節目となった今回は、変化に富んだ題材が揃った高峰に届く抜きん出た作品はなかったが、興味深い題材に取り組む意欲的な姿勢は見るべきであった。

当選作波佐間義之氏の「加熱炉」は、製鉄所で働く人間の生の陥穽を描いた作品で、加熱炉の灼熱の舞台上に繰り広げられる

- 「消えた池」 森 幸夫
- 「穴のあいたボートをください」 くれき さい
- 「生き物たちの宴」 鎖藤千鶴
- 「おかえり」 佐藤由美子
- 「マテリアル・ガールズ」 悠希マイコ
- 「崖下の夢」 関屋 智
- 「妄想の淵」 柳澤 進
- 「遣された絵」 折口 真
- 「癒された病」 細谷 清
- 「タグ」 大島龍彦
- 「思慕」 磯部 彰
- 「漂流」 藤堂勝汰
- 「私たちの罪」 木元智子
- 「ローマ人顔の友人」 黒田直隆
- 「三年後」 渋谷史恵
- 「軍服をマントにかえた男」 ただえみこ
- 「紅い蓮」 林 貞行
- 「今が旅立ちのとき」 山下一子
- 「夕映えの刻」 三村雅子
- 「氷結の夜空に舞う」 秋山よしひさ
- 「雨乞い」 藤代淑子
- 「新しい正義・認知症」 黒沢良子
- 「山田寺からの手紙」 高松洋子
- 「ごめんね」 立花あゆみ
- 「たそがれにかえす」 多紀祥子
- 「その男ZUMBAを踊る」 乾 達也

※今回は力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

犯罪の背後に、一人の労働者の運命が炙り出される構造は、燃え上がるスリルと一体になって、高揚感を醸し出している。罪に堕ちていく溶炉という奈落への畏が、一人の人間の運命への足掻きを描き出している点には結実がある。特に加熱炉という素材には、熱地獄の印象が濃く、その描写が悲劇の熱感を反射させている点ではある程度成功し、迫力を与えている。ただ、副主人公の運命に呑み込まれるその暗い情熱を、溶炉の滾りたつ鉄の赤さに重ねる象徴性がやや足りず、そこがもっと鋭く描かれたなら、いっそう結晶度の高い作品になっただろう。その点が惜しまれる。

灼熱と対極の、水に象徴される内面の劇を表した作品が、高岡啓次郎氏の「凍裂」である。自分が発見して訴えた指名手配の容疑者が、最終的には無罪になるのだが、その過程で容疑者の母親が自殺する。結果的に彼の母親を自分が殺したことになる罪悪感に苛まれて、苦しさで謝罪の気持ちからその容疑者とメールで文通するようになる。氷解する内面が愛情に変わり、主人公が家庭の不和を逃れて、そちらへ救いを求めていくストーリーだが、北海道の風土に根ざした凍裂という氷の割れる音が心の亀裂と直結しているところにリアリティがある。胸奥が冷たく割れる音は確かに響いてくる。しかし家庭の不和から犯罪容疑者の懐へという飛躍が、作り物めいた危うさを持ってしまっているという弱点もあり、凍裂の心理劇の結節点を評価するか、

弱点を重視するかで選考委員の支持が分かれた。私は「加熱炉」と「凍裂」の二作品を当選とすべきだと主張したが、受け入れられず、特別賞に留まったのは残念である。

河林満賞、室町真氏の「梱包の方法」は、両親の不和からの内面の傷が異性への屈折した形となって、男女の関係を歪めていく宿命を書いた作品だが、アルバイトの店主の男女のドラマと主人公自身の男女の不能のドラマが食い違っていて、成功していない印象を覚えた。前半だけにしほって、自殺する店主の内面劇を深めた方がテーマを掘り下げられた気がする。室町氏の技量はもつと異なった素材に発揮されると見ているので、むしろ次作に期待したい。

歴史小説特別賞の、吉田満春氏「鎮遠自沈ならず」は、注目すべき題材を扱っていて、特に魅かれた。日本人は一般に日露戦争の内容への知識が乏しい。作家や評論家も意外に知らない。まして、日清戦争についてはほとんど歴史の知識を得ていない。ただ「勝った」ことや、李鴻章、下関条約、賠償金くらいのものである。この作品はそういう受け手側一般の知識不足で損をしていた。私自身もこの小説によって清の北洋艦隊の実態と当時の日本海軍の事情を知った知識の乏しさだったが、それらを掘り起こして現代に提示する吉田氏の摘出力は抜群で、私も深く教えられた。日清戦争から日露戦争への日本海軍の変化や清の側の内情は、これまでほとんど顧みられることがなかったように思

うが、その点だけでも賞場に値する。さらに、続く日露戦争でロシアの東洋艦隊が立てこもる旅順港の入口を封鎖してしまう閉塞作戦に、日本海軍が清から鹵獲していた戦艦鎮遠をなぜ用いなかったのか、当時の陸軍の内情を大胆に暴いている点でも、歴史の裏面を見事に別出している。材料が集まりすぎて整理しきれなかった点、山本権兵衛に対する真の評価が不十分であった点、戦国時代や幕末など歴史の華やかな舞台に比べて、日清・日露の戦争をあまりに日本人が知らないことをどう補ってストーリーを展開するかに読み物としての工夫が必要だった点など、マイナスはいくつかあるが、私自身はこの作品が歴史小説賞当選でよかったと思っっている。

毎回優秀賞の層は賑やかでどれに涙を飲んでもらうか苦労するのだが、今回は数が少なかった。「1969年・理英子と」(竹内清)は、学生運動末期の内ゲバと警察の監視下での閉塞生活を描いてリアリティがあり、実体験に基づいた叙述は当時の雰囲気をよく伝えて一つの世界を形作っていた。ただ、逃亡して転がり込んできた女性の父親が府警の本部長という設定は、事実かもしれないが図式的すぎ、やり過ぎる気もした。最後がやや物足りないのは、その後の女性の消息と主人公の方向が曖昧だからだろう。せっかくのリアリティが生きていない結果になった。

「雨の愛子」(豊岡靖子)は、流産した胎児の亡霊が、生

活の中に入り込んでくる話だが、奇妙に亡霊を生動させる不気味な筆は迫真力があり、生々しい存在感を残す。生命の糸を紡ぐ女性の感性が現出させた恐怖世界であるものの、暗闇から折りに通じる方向も感じる。

浪人生に寄せる母性的やさしさを主軸にした不倫を扱っていたのは「負の気配」(渋谷江津子)である。文章にもその抱擁的な丸みが出ていて、包まれるような雰囲気を感じているが、やや短く、何かを書き切っていない恨みが残った。文章のまろやかさは、一つの世界を形作りうるものだろう。その面では魅力を感じる。

「沖繩の叔母さん」(佐藤多美子)は、最後になってほんとうは叔父さんだったという驚きが作品の本質をなしている点で、私は大いに不満を感じたが、他の選考委員たちが強く推奨するので多数決に負けた。私はトリックが作品の中核になっている作品を評価しない。ただうまく騙されたという読後感しか残らないからである。佐藤氏には次回を期待したい。

傷その他不足はあるが優秀賞よりもっと印象に残っている作品は、「白富士病院」(きなりかず)、「獣魂碑」(美里あきら)、「幻想が生の実在を」(佐山広平)、「罪」(土岐田耕)、「鱗」(福野暁)、「未必の同意」(成瀬健太郎)「折り目」(河津四方)である。

「白富士病院」は医療の現場から親子の絆や人間関係の荒

廃を鋭く見つめていて、深い告発性がある。文章が生硬で表現が馴れていないのが惜しまれたが、そのテーマの重さは現代に向けて発せられるべき意義を有している。「獣魂碑」は、精肉店の店じまいを、アフリカの動物ツアアのガイドをしている主人公が帰国して見届ける内容になっている設定はおもしろいが、肝心の動物の生命への問いや鎮魂がなされていない。野生の命と食肉の命を繋げる生命への問いが投げかけられていなければ、せつかくのアフリカの舞台は空転してしまっただろう。「幻想が生の実在を」は、働きながら通う定時制高校の青春を、実直な筆でよく描いて、一つの世界を着実に留めている。実質のある作品である。「罪」は土岐田耕氏の連作で、七色の二番目に位置する女性がよく描けていて、一気に読ませる力はプロフェッショナルの力量を示している。シリーズ

の完成を期待したい。「鱗」は怪奇譚を下敷きにして現代の画家の「鯉」との恋愛だが、筆力の高さ、文章の密度はかなりの腕前で、よい素材を得れば目を瞠るものが書けそうな気配がある。「未必の同意」は退職させて自殺した部下の妹と男女関係になる構図は、「凍裂」と似ているが、リストラがよく出てくる話なので、筆者が昨年見せたアメリカとい



銀華文学賞優秀賞メダル

う素材に比べると新鮮さに欠ける。「折り目」は木彫りの人形を彫り続けて死んだ父親の業と遺産を、どう引き継ぐかという息子たちの謎解きに寓話のおもしろさがあるが、もう一つわかりにくく、胸に突き刺さってこない恨みがあった。ヨーロッパを舞台にした作品は珍しいだけに次はどんな作品が書かれるか楽しみである。

全体的にタイトルがよくない。内容を象徴していない題が多く、首を傾げたくなるタイトルもある。優秀賞や奨励賞の作品にもタイトルが不十分なものがある。自分の作品を突き放して見る距離を持ってほしい。

小説を書くことでほんとうの自分を見つめ、自身の生を振り返ることは、本来はたいへんなことかもしれない。この世界への問いを投げることは、エネルギーのいることかもしれない。しかし銀華の年齢に立つとき、生に対する刻印は、ここにしか、今しか刻み込めない行為でもある。銀華の特権はもっと大きく深いものもあるような気がする。さらに挑戦をしていただきたい。

今回は、一〇回目を記念して、当選作、特別賞、歴史小説特別賞の各作品を文芸思潮E・ブックに電子出版をすることにした。より多くの方の目に触れるようにしたい。

恥ずかしがらず、一人称というハンドカメラも。

都築隆広



銀華文学賞の応募作は下読み段階では大半が三人称小説である。それが一つ減り、二つ減り、最終選考ともなると、半分近くが一人称小説となる。何故、こんなことが起こるのか？

第三の新人があらわれてしばらくの後、この国には自分のことを『僕』と名乗る、軟弱ではあるが、知的で繊細なモラトリアム期の青年達を主人公にした一人称小説、僕小説なるものが席卷していた時代があった。その代表格が今やノーベル賞候補と目される村上春樹であり、三田誠広であり、伊井直行であり、例を挙げてゆくとときりがなく、こうした作家達も今となっては三人称でも小説を書くが、伊井氏に至っては「五十歳を過ぎた自分に戸惑い、年齢にふさわしい文体がこの世に存在しない」と「青猫家族転巻録」なる「五十過ぎの僕小説」という傑作を生んだ。

銀華文学賞の応募してくる世代の多くは、僕小説が

全盛となったバブル期初頭やそれ以前に働き盛りだったため、こうした作品にハマらずにきたのではないかと。小説というと、かつて通勤電車で読んだ司馬遼太郎や松本清張のような、キッチリとした三人称文体で書かれていなければならないという、気負いや先入観がありそうだ。

三人称とは、いわば鳥瞰する神の視点。映画で喻えるならクレインカメラだ。トルストイの「戦争と平和」に出てくるような大戦場を描くにはこの文体でしか書けないものの、専門教育を受けていない初心者が扱うには正直、複雑過ぎて荷が重い文体でもある。

それに比べて一人称とは個人の眼、ハンドカメラだ。書くのも非常に楽だし、極めれば奥も深い。会社勤めをしながら同人誌や文芸誌にバリバリ作品を発表してきた猛者ならともかく、定年後に初めてペンをとろうという人には、後者の語り口もおススメしたい。

さて、今回の河林賞「梱包の方法」も一人称僕小説の傑作である。作者には失礼だが、文体模写といっても過言ではないほど村上春樹にそっくりな文章であり、現在の村上氏よりずっと、過去の村上文体に似ている。正確に時期を割り出すなら、最初の短篇集「中国行きのスロウ・ボート」の頃ではなからうか。まだ垢抜けきつてない、ユーモアの中にも素朴なモラトリアムが漂う作風である。特に、大人になりきれない「多摩川電化」の店主のキャラクター

が素晴らしかった。五十嵐編集長から、肝心なヒロインのキャラクター描写がおろそかになっているというご指摘を受けたが、この時代の村上春樹作品もこんな感じで、どこか脇の甘い作風だった。そんなところまで忠実に再現されているといったら、これまた作者に失礼だろうか？

当選作「加熱炉」。こちらはカッチリした三人称文体で書かれている（ただし、主人公不在の時間は描かれないので、比較的一人称に近い三人称）。選考では、何人かの審査員の熱烈な支持を集め、平均的に支持があった「凍裂」やそれに続く「梱包の方法」や「沖繩の叔母さん」等に、ギリギリのところまで競り勝った形だった。読みどころはなんといっても、熱風すら感じさせる加熱炉の描写であろう。後半の展開や結末も実に洗練されている。ただ、「無人君」や「MDMA」といった妙に現代的な単語が、古き良きプロレタリア文学の雰囲気をつまみ出したのは惜しい。

続いて、平均的に支持を集めた「凍裂」。こちらが当選作でもいいと思ったが、作中人物が犯した犯罪について不明瞭な点が多いとの声もあって、特別賞に。途中からの展開が独創的で、「もの忘れ」という日常的な問題から、非日常へと見事に物語が飛躍している点を評価したい。しかし、ラストシーンは「凍裂」という言葉をびつたりあらわした展開になるものの、このまま終わっていいのかわからないという疑問も残った。「加熱炉」にもいえることだが、日

本文学には「耐えられない現実を押し潰される人間達を描く」といった側面が良くも悪くもある。登場人物達も厳しい現実をただ凍えて引き裂かれ、あるいは過熱されて、蒸発してしまう。読者の想像を上回るような逆転や、救済が欲しい。

奨励賞の「きらきら」とけい」。最終選考で最も支持した作品であるが、私が支持する作品はいつも早めに当選作レースから脱落してしまう。我ながら、まるで貧乏神である、肝心の物語は、えせ谷崎のような関西弁の主人公による、橋田壽賀子ドラマ顔負けの女一代記だ。成金趣味との批判も喰らいそうだが、夫の連れ子が犬に噛まれたことをずっと、主人公が引け目に感じているという一点に、それこそきらきらした文学性が宿っている気がした。

優秀賞「沖繩の叔母さん」はオチもの。見事な叙述のトリックで、選考委員一同が騙された。結末や叔母さんのキャラクターもさることながら、素麺ばかり食べていたという少女時代の貧乏風景が涙を誘う。

歴史小説「鎮遠自沈ならず」は史料価値と着眼点はいい。とはいえ、日清・日露の海戦エピソードにはどうしても難解さが付き纏う。かつて漫画家の江川達也が「日露戦争物語」のなかで、日露の海戦を緻密な海図付きで説明していたが、大半の読者は匙を投げていた。本作で描かれる「湾の出口に自軍の船を沈めて敵軍を閉じ込める」作

戦も、「三国志」の赤壁の戦い並みにシンプルな策なのだが、文章で読んでしまうとやはり難しく感じてしまったのは、もうひとつ推せないところだった。

歴史や戦争、緊迫した事件を描くには、時間や空間すら超越する神の視点、三人称というクレレンカメラが向いている。反対に個人の生き様を描くなら、一人称というハンドカメラの方が手に馴染む。

どの文体を選ぶかが、意外に書き手の明暗を分けている。

細く険しい道

大高雅博

今回は下読みの段階ではいつもより厳しくしようと考えた。しかし、結局は、そうはいかず、点数は甘くなったようだ。それは、作品の中に書き手の熱い思いが感じられるためかも知れない。

下読みの段階で、ミステリーの作品があった。この枚数では、中々難しいと思われる。特に、ミステリーのトリックは、アガサ・クリステイが全部考え尽くしたと言われて



いるほどだ。それでも現代のミステリーの作家達は、細い出口を探しながら作品を作り続けている。大変な道であるが、何かを見つけていたかといえたいと願っている。

今回は波佐間義之氏の「加熱炉」を興味深く読ませてもらった。波佐間氏は、以前、カネミ油症事件についての憤りを背景にいくつかの作品を書いている。今回はそれは別系統の作品であるが、例えば次のような文章がある。「熱風が勢いよく舞い上がる。まるで地獄の釜だ。炉の中の周りを囲った耐火レンガまでが焼けただれ、熟したトマトのような色を呈している。」

加熱炉の熱さ、が伝わってくる文章が幾つも見受けられる。働いている人間の、根底で持っている憤り、社会の矛盾が見える。小説を書く動機があり、それが、この小説を成り立たせている。

室町眞氏「梱包の方法」は、まず題名が良い。全般として、題名が良い作品が多い。かなりのマイナスになっている場合がある。題名も作品の一部と考えて気を遣って欲しい。「梱包の方法」は、青春を梱包する意味なのだろうか、中々の作品だと思う。ただ、最後、別れた女性と再会するのだが、それがどうだったか、評価が分かれるところだ。

竹内清氏「1969年・理英子と」は、過激派ものであるが、エンターテインメントとしても楽しめる。行き場をうしなつた男女が、逃亡計画を練るが、もう少し先に進んだ

方が良かったと思う。枚数の関係があるのかも知れないが、惜しい感じがする。

佐藤多美子氏の「沖繩の叔母さん」は、面白いアイデアであったと思う。読んで見て下さい。

出井孝子氏の「さらさら とけい」は関西弁でかかれた女性の一生で、この枚数で良くまとめている。

きなりかず氏の「白富士病院」は治療しない病院を描き、現代の問題を問いかけている。しかし、文章が硬い。

丸山史氏の「胸の洞」は、図書室の先生と、不思議な女子学生の話であるが、面白く読ませていただいた。

戸澤洋二氏の「GUITAR」は、ギターにたいする、こだわりがよく表れている。物に対する思い入れも十分に小説になり得る。ただ、筋としては、やや、平凡である。

福野臯氏の「鱗」は不思議な作品だが、僕は、何故か小栗虫太郎のペダンチックな小説世界を思い出してしまった。

最初に、ミステリーは、細く険しい道というような意味のことを書いたが、考えてみれば、どのジャンルでも新しい小説をかこうとすれば、みな細くて険しい道である。

例えば、不透明な風船の中に僕はいる。どこにも抜け出す道は見えない。しかし、針でほんの少しの穴を開けるだけで、風船は破裂して、あつという間に新しい世界が開かれるはずだ。小説には力がある。そう、信じたい。

読み応えはあった

八賞正大



この賞も第一〇回目を迎えることになった。五十枚という制限だからそれに近い枚数分描き切った作品こそ……という思いが、今回はどこか外れたというか、不思議な感じがした。それでも力のある作品は多く、読み応えはあった。単にうまいとか、よく書けているのみならず、作品として好きか嫌いとか、インパクトを感じたか否か、己の文学観とどう切り結ぶか……まで意識しながら読んだ。印象に残った作品を上げて行こう。

「負の気配」今回、当選作があるとすればこれだと思つた。枚数は二四枚、えつ、規定の半分だ。しかもあまり冴えない女性が主人公。《四十歳を目前にした夫と結婚したのは五年前、私が三十五歳のときだった。夫の実家では、飲食店が立ち並ぶ一角で酒屋を営み、ほかにもアパートやちよつとしたビルも所有していた。私達は実家で三年暮らし、その後、結婚時の約束どおり、町はずれに家を建てて

もらい独立した》何事もなさそうな夫婦、子どもはできない。

しかし、かすかな事件が起こる。その二階の空き部屋を美大二浪の青年に貸すことになる。彼（芯ちゃん）は五歳のとき実母に死なれ、……高校は下宿ですごし、なんとなく気になる青年ではあった。いや、下手な説明はよそう。最初に芯ちゃんを見たのは、本家の法事のときだった。テールから離れたところで、ひざ小僧を抱えていた伏し目がちな瞳は、古井戸の水面のようで、その姿は丸ごと私をたまらない気持ちにさせた。肉薄い鼻と華奢なほほが、青磁のように青白く……芯ちゃんが我が家に来たのは、私が八ヶ月目に入った男の子を、死産したころだった。時々泣いて暮らしていたのを芯ちゃんは知っていた。

ある日、テールに伏せて泣いている私の肩を、後ろから抱えてきた。私が拒まなかったのは、芯ちゃんの体温がそのまま芯ちゃんの淋しさのように思えたからかもしれない。「ありがと」と言い、私は芯ちゃんの胸の中で思いつきり泣いた。光を浴びることができなかった我が子と、芯ちゃんが発する空しさ、私の喪失感、が三角形で繋がった瞬間だった。……

勝負あった。タイトルはいま一つだが、すでにこのページ目から、この不倫という名の命の関係は、見事に読者の心を貫いたのだ。そんな関係が続き、さすがにやばくは

なる。しかし事態を見抜いた母親が出てきて、夫と芯ちゃんと私の間を取めてくれる。《芯ちゃんので肩をはいた母が岩盤のように見えた》と。不遇な青年芯ちゃんと、取り立てて華のあるわけではない主人公、純粹ゆえに未成熟なまま強く反応し合った二人は、それぞれの人生へ半歩背を向けて歩み出す。《夕方、干しあがった洗濯物にくるまり私は少しだけ泣いた》と終わる。どうだ、布団で泣くのは、自然主義文学のかつての旗手田山花袋だけではない。また年齢が若くなくても見事に背中では蹴れるのだ。

「沖繩の叔母さん」これもまた当選作に押ししても良いと思った。二二枚と四行。《春浅い三月の始め、差出名大阪のS市にある老人施設から》速達が届く。そこには「叔母」の名前の沢田恵子とも書かれていた。彼女は主人公が小学生の時、一度会っただけの父方のたった一人の肉親だったところ、主人公の家は、かつて《今にも潰れそうな、小さな鉄工所で働く父と病気がちの母》だけであり、親類付き合い合をする余裕もなかったのだ。そんな家へやって来てくれたのは、その恵子叔母一人だけだった。しかし、思い出すとやけにはしゃいで派手な感じ、化粧も濃厚だった。父は怒りを表し、母はどこか怯えて硬くなっていた……。恵子叔母は貧しく大変だった家庭へ、一と月分ほどのお金をおいていってくれた。

さて、その施設へ主人公は迷惑な気持ちを抱えつつ行く

ことになる。《血の繋がる人間は、叔母で終る。……一人っきりの、さばさばとした人生が私はすきなのだ》と、寂しさを押し隠し居直った気持で。すると出てきたのは——沢田恵三という叔父さんだったのだ！ 主人公の貧しかゲイの叔父さんだったのだ。

ラストがいい。《ハイビスカスのワンピースならぬ、白い長袖のセーターの上に、ベレー帽と、同色のピンクのロングベストを着て小指を立てている、何十年ぶりかに見る「叔母さん」ならぬ「叔父さん」の女らしい仕草が、たまらなく可笑しかった。そして、なぜか突然涙があふれ出て、なにもみえなくなつた》

人間の孤独は、性別などを超越し命の有難さに向かうという事実を示してくれた小説だ。商業誌文学が単に奇を衒う新しさのみを追い始めて久しい。言葉が人間の情に活を与え、命の有難さを感じ直させ得るものである——という原点に戻ることだ、それがここにはある。

「加熱炉」ある分塊工場に勤める青年が主人公の話である。その工場には溶鉱炉があり《炉からの熱風が地上10メートルに架設されたクレーンまで勢よく舞い昇っている》そのクレーンを扱うのが仕事だ。《クレーン運転室は真冬でも40℃は下らない……一回だけエアコンの故障で熱中症になりかけたことがある。頭がボーっとしてきて体

が震え出した……腕まくりした肘が、焼けた下アの鉄の部分に触れて焼けどした。皮肉にもそのショックで彼は意識を取り戻し、熱中症は免れた》とある。過酷な現場だ。そこに事件は起こる。

修理のために来ていた電気整備工を大声で呼んでも返事はない。主人公は「修理中」の掛札を外し、直ったクレーンを操っていく……その瞬間、何かの物体が炉の中に落ちて消滅したのだ。そのあたりの描写は実に良く臨場感をもつて煌いて伝わってくる。

ただ、話はそれを目撃し擁護してくれた？ 仲間からの「借金」要請になり、その仲間も実は女への情のために事件をたくらんでいた……という金がらみ、情がらみの話になつてしまった気がする。ラスト、その仲間も加熱炉へ飛びこんで自殺してしまう。

プロレタリア文学とは時代状況は違うが、人間の扱いかねる巨大エネルギーに直面する末端の人間の一瞬のミス、それに触れた人間としての不条理と命の値踏み……そういったものを読みたかった。原発まで大きくはないにしろ通底したテーマとして。

「寒夜」九十一歳になる父親。五年前に、彼は八十三歳の妻を亡くしている。その息子から見た話。《わたしは年子の兄と妹二人の四人きょうだいが、四人とも東京で暮らしているの、それぞれが適当な間隔をおいて浜松市に住エゴを捨てた相手を思いやる気持ちがある。筋書きは単純ではあるが、この他者を思いやる互いの心は、読んでいて涙が出てくる。人間の心の気高い感性の骨格が描かれている。淡々とした文がいい。

「雨の愛子」流産して子どものない女性が、娘の幻想を見る話。描写にかなり迫力があり、診察を受け妄想とみなされるもの、それを超えてまだ残る何かがある。そこに人間の思いの深さを見せつけられる小説の終わり方に工夫を感じた。

「1969年・理英子と」学生運動の時代。組織から抜けた女学生をかくまう男。彼女の父親は警察のお偉いさんだった。何の役得もなく、身勝手な彼女も去るが、他人の物語は他人のものであって、寂しくも己の道を探そうとする青年の話。派手さはないがその時代の心性は描けている。

「凍裂」インパクトのある筋立て。夫との仲が不遇な女性、偶然から冤罪を生ませ、その犯人とされていた男を愛してしまう。タイトルはともインパクトがあり、内容を表しているが、男がなぜ逃げていたのか、その母親の自殺、そしてラストの救いようのなさ……などどこか作られた印象があり、強くは押せなかつた。

「獣魂碑」ケニアでガイドをする弟と生き物の解体業をする兄との交感。人間の業に対する目が描かれている。

む父に様子うかがいの電話を入れる》という子どもたちとしての対応。文は淡々とした会話と想い出、また仕事の描写の中に、老いた「間もなく」かもしれない父への情が湧いてくる。《思いがけなくも唄を口ずさむ父の音が偲び入ってきた。歌は「五木の子守唄」であった。父の唄を生まされてはじめて聞くわたしは、……そのプロンプターのような低い寂れた声は、どうあがこうと逆らおうと、どのみち枯れて朽ちていくよりほかない一人野末を行く老人の孤独の木霊のようで、わたしは指先二センチほど引き戸をずらして覗いた》そして気難しく利己的で傲慢で母親に文句ばかり並べ立てていたかつての父親は洩らすのだ。《……なあ、だれでもいいから、すぐにも同居してくれないか》今日まで胸のうちで硬い塊になるまで、ぎゅっぎゅつと丸めていたものを、ふいと投げつけられてしまったわたしは、さつき遠くに聞いた、今のうちだぞとの声は、やっぱり親孝行をするなら今のうちと囁く父の声だったと悟つたが、わたしは、あくまで幻聴にしておきたかった》人間の命の末期を看取る者の、綺麗事でない事実を淡々と描くのも文学の役目だと思える小説だ。

「アリアン恋歌」古の朝鮮の民謡に題した悲恋の話。誓い合った恋人が日本に行ってしまう。その恋人を追って主人公の女性はやがて捜しに日本に来る。会えたと思つたのもつかの間、彼にはすでに妻子がいた。……女性たちの、

「水の中の笑い声」 聾啞者を母にもった娘の人生。障害というはある種現代的な観点から捉えられるが、この舞台は江戸時代であり、なかなか斬新な切り口を感じた。

「栗栖野」 本当の命の歌を求めた和歌読みの男の人生。出てくる短歌はかなりのものと思われるが……。

「梱包の方法」 十九歳の青年の眼から見た電気屋のアルバイトを通しての、大人の世界？ 梱包の方法というところが、何か惹かれたが、どうもそれが生かされていないような……そして文体が、すでに読んだことがあるような。

「白富士病院」 癌で死んで行く一人の老女を看取る医師の苦悩。社会派的な医療への問題提起がなされている。

「父はひとり」 健康保養所プリズンという所に拉致された男の話。発想は面白いのだが、果たして個人の意志を無視したそんな拉致、そして場が可能だろうか……。

「いのちの記憶」 人生を共に過ごした愛犬の死。心情がよく描けている。

「熾火」 父母を亡くし、抑鬱神経症を患う弟と暮らす兄弟を支えつつ、本人が事故になってしまおうという結末……設定は切実だが解決が見えない。

「スコール」 あしなが「おばさん」としてベトナム人の子に援助し、裏切られる元小学校女教師の話。教師の心機は伝わる。

「GUITAR」 青春時代の思いでのギター探しと昔の

を見下す十階の事務所からは雨に煙る新宿西口の高層ビル群が見えた。彼は背を向けたまま「お前よ、悪を書いてみないか」と唐突に切り出したが、ぼくににとってはそれはまさしく青天の霹靂だった。何日か前「消える島」の原稿を渡してあったから、その合評でもあるのだろうと期待していたが、そのことには何も触れず予想もしなかった提案に、ぼくは一瞬ためらったが、「先生が書けと言われれば挑戦します」と答えていた。中上健次は言い訳を最も嫌う。大抵の場合、ぼくは即答していたが、その時の一瞬のためらいに彼はぼくの心中を察したのだろう。「飲みに行こう」と誘った。当然、ぼくは従う。事務所のある建物と面した大通りへ出ると、雨のせいで空車のタクシーはなかった。仕方なく近くの居酒屋へ入った。店主が気を利かせて奥の席を取る。彼はいつもの焼酎に梅干しを二つ入れたグラスを傾ける。ぼくはビールだった。

「お前は時間がないだろう」「はい」当時のぼくは昼間は東京都のゴミ収集作業員として汗を流し、それが終わると中上健次事務所へ。そして、新宿から藤沢の自宅へ帰るという生活であったから、原稿を書く時間をこじあけるのにもいつも悩んでいた。「お前な、時間がないということは無駄な時間がないということだぞ」ハイライトの煙草をくわえた彼の口元へライターの火を差し出すほどの目を見てやさしい口調で告げる。「はい、わかりました」ぼくは多分、

仲間たちとの再会。青春の回想感覚は描けている。「遅い日没」 山岳小説。登山者を思う麓の女性の心が清く、文体もいい。山をこよなく愛してしかも登山を人生の糧としてきた作者ならではの。

「罪」 性描写はおどろくほど巧みに描かれてはいるが……。

「ぬけがら」 自殺した母親、蟬の抜け殻に投影する主人公の思い。描写は鮮烈なところも。

「動かない海」 共に癌になった老夫婦の回想と思ひ。落ちていた文章で味わいを持って読めた。こんな夫婦の老後もあるう。

時間がない

秀作にしようとする執念

小浜清志



中上健次事務所の電話番号をするよ
うになって半年近くが過ぎた雨の日の夕方、中上健次はいつものようにワンルームの事務所へ無言で入ってくるなり、窓辺へ進み煙草を吸った。ぼくは灰皿を片手にそっと背後に近づいた。新宿中央公園

小学生が担任の先生へ返事をするような顔をしていたであろう。「俺もな、羽田空港で飛行機の荷の積み降ろしをしていただろう、乗り換えの神田駅の喫茶店で原稿を書いて、あと十分、欲しいと思っても遅刻する訳にはいかなから席を立つ。苦肉の策として職場の休憩時間に便所へ行くんだ。洋式の便器のフタを閉めその上に紙を広げて原稿を書いたこともあった」彼の言葉は重かった。それまで何度か、時間がないことを理由に誘いを断ったことがあったが、その日を境にぼくは中上健次の誘いを一切断らなかつた。以来、ゴールデン街、文壇バーへのお伴は勿論のこと、カンヅメ先のホテルのバーへ、果ては和歌山の行きつけの飲み屋、石垣島のリゾートホテルまで来いと言われればとんで行った。中上健次と向き合う時間だけは絶対に無駄ではないと腹をくくっていた。

さて、悪を書けと言われてもまったく何もできない日は何日か過ぎた。十日後にシノップスを届ける約束になっていたが、作品の糸口さえつかめぬまま時間だけが過ぎる。いっそのことギブアップして「消える島」の原稿に戻りたいとも考えた。(自信作であったし、後日、ぼくに就いて初めて芥川賞候補にもなった)なぜあの作品ではなく、あえて悪という、これまで想像すらしなかったものを書かねばならぬか。苦悶は朝の目覚めと同時に広がり一日中重くのしかかるが、思考はずっと停止したままだった。体の

変調すらきたしていた。いよいよ約束の日を一日残すだけとなったとき、それまでの考えを止め、悪とは一体何かと考えた。それまでは悪につながる筋書きや人物などを懸命に書きとめていて、ラチがあかなかった。しかし、九日間悩みつづけてきて悪を解明する鍵を見いだした。つまり、悪の構造を作るのではなく、悪という行動パターンを書けばいい。これがぼくの解答だった。そして、一気呵成にシノップスを書きあげた。この世には悪も善もない。生きる人間がいるだけだ。金を作るために国有林から木を盗み密売する。その作業中に転落する仲間も見殺しにする。金を貸していた男の妻を凌辱する。その男の中に悪はない。ただ必死に底辺を生きる。これが十日間でぼくが考えた作品のテーマだった。約束の日、中上健次を訪ねる。彼は黙って多くの説明を聞いたあと簡単に尋ねた。「何日で書ける」「四十日」「長い」「では何日もらえますか」「二十五日」「わかりました、ではこれから書きます」立ちあがっておじぎをするぼくを制して「よし飲みに行こう」と彼は平然と言う。時間がなくても飲む時間くらいはあるだろう。こうして生れたぼくの悪を描いた「陽光」であったが、書きながらぼくは感謝していた。まったく異質なものに挑むことで作品の幅を広げさせようとしてくれたのだと。さて長々と自分のことを書いてしまったが、何らかの参考になればと。十回目となった今回の選考でしみじみと思いつ

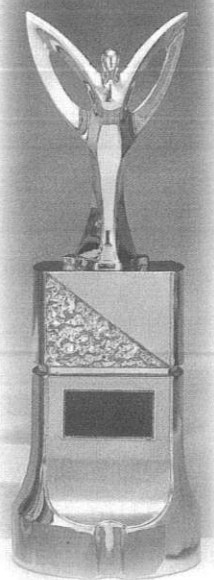
らされたのは、上手い作品が多かったということである。高得点をあげた「凍裂」「梱包の方法」「1969年・理英子と」「沖繩の叔母さん」「白富士病院」のどれもが筆力もあり、小説としての迫力もあった。私は「沖繩の叔母さん」を非常に興味深く読んだ。素材としては一流である。折角、五十枚という枠があるのだから、角度を変えた場面があったならさらに深みのあるものになったであろう。作品とは作者の誕生させた想像物であり、作者は神のような存在である。しかし、神ではあってもあまりに無雑作に創ってはならないし、不用意に人物を配置してはならない。「梱包の方法」の後半でなぜ無理な再会が必要であったか。これがなければ私は更に加点をしただろう。同じように「凍裂」の重い展開は作品を軽くしているが、この作者の筆力は圧倒的である。

う。「歌うテネシーのじゅんちゃん」は軽妙な語り口は素材に恵まれれば輝きを増すであろう。

毎回、残念なことは題名をもっと工夫して欲しいということである。題名とは初対面の人の服装や顔のようなもので、普段着ではない気くばり目くばりをすべきであろう。

最もお願いしたいのは推敲である。誤字脱字があるだけでも作者の品位を問われるし、作品として世の中に出そうとするからには、何度も眺め直し書き直しをすることは当然のことである。確かに書く作業は辛く疲れれるものであるが、作品を書きあげることだけで満足するのではなく、一流のものにしよう、秀作にしよう、という執念は必ず読む者に伝わるしそれが作者の大きさになる。推敲にやりすぎるといふことはありません。森瑤子という作家のデビュー作は百回の推敲をしたそうです。私の先輩の東峰夫という芥川賞作家は「オキナワの少年」を十年間書き直したと言う。小説を上達させるには推敲しかありません。書き直す作業の中で文章はみがかれてくるし、作品を読む力、創る力も生れてくるのです。

選評



河林満賞記念トロフィー



選考会風景

第11回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

11回を迎えた今年も、どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格●2014年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定

400字詰原稿用紙50枚以内（20枚くらいのもので可／原稿用紙使用の場合は必ずA4の原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーを応募するのが望ましい）。※**応募審査料が1500円かかります。**

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日（年齢・生年月日のないものは失格とする）④〒（ないものは失格）・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門（第11回銀華文学賞応募作品と明記）⑨応募審査料1500円を郵便為替で同封。外国からは15USドル。

応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）★当選作は電子出版

河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切●2014年6月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2014年11月末発売の「文芸思潮」58号に発表する。受賞作は2015年1月25日発売の「文芸思潮」59号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※恐縮ですが応募審査料1500円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・

イラスト・漫画賞

授賞式&祝賀会・新年懇親会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わしましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十六年一月二十五日（土）

授賞式午後二時／祝賀会・新年懇親会五時

半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール

東京都大田区下丸子三・一・三

TEL03・3750・1611

※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七編・五十嵐まで

または090-8171-9771まで

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ

千葉大文学部卒

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大文学部卒

80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

都築隆広

つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ 東海大文学部卒

2000「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞「狼を見る」（「文芸思潮」）「ハンコの町の鰻がいる家」（「三田文学」）他

短編映画「ウミスズメシ」脚本（吉本興業・宮崎県門川町製作）他、放送作家としても活動中

八賞正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

91「十二階」で新潮新人賞受賞 文芸学校・

NHK 学園講師 主著『「シュルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ

劇団四季など様々な職を遍歴

87作家中上健次に師事、マネージャーを務める

88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒

79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞 84-90タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長

主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）『鉄の光』他の作品に「ノンチャン、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」などがある

作家集団「塊」メンバー

加熱炉

渡佐間義之

分塊工場の東側の煤煙に汚れた窓ガラスが、少しずつ明るみを帯び始めた。六時になれば夜勤が終る。真つ暗なトンネルからやつと抜け出したような安堵感が秋野伸夫の顔に表れる。彼は大きな欠伸を一つ漏らしてクレーンマン控室にある洗面台で顔を洗った。いつもの習慣だ。夜勤が五日も続けば心身ともくたばってしまう。二割増しの深夜手当がもらえるからと喜んでいる者もいるが、伸夫は夜勤になるといつも気分が減入りがちになる。付属部門を除けばY製鉄所の工場は三交替勤務が原則だ。一日を三つに分けて絶え間なく操業している。それも輪番制で勤務を回っていくわけだから定休を除けば嫌でも三週間のうち一週間は夜に働かなければならない。

六人いる彼以外の係員は全員出払っている。それぞれの受持のクレーンで作業をしている。彼だけがクレーンのリ

作している時は何のことはないが、ちょっと何かに気をとられた場合など操作のリズムが狂ってしまう。そのような時の防止策としてリミットスイッチがあるわけだ。

始業点検時には異常はなかった。だから電気系統のどの部分かでの突発的な接触不良が発生して装置が働かなくなったのであろうことは伸夫にも分かっていた。が、電気系統の故障となると目に見えないだけにやはり専門職でないと容易に手を出すことはできない。自分で手出ししてうまく修理できればいいが、ヘタをして四〇〇Vの電圧に触れて感電でもしようものならそれこそ悪いことでも仕出かしたかのように上司の叱責をくらう。もちろん勤務成績にも影響してくるのは必至で、それだけですむならまだいいが、労災として届け出なければならぬような重大災害にでもなれば会社の安全成績にも大きく影響を及ぼすことになる。そうなると現場の上司たちは会社の幹部や安全課から呼びつけられ、安全教育という名のもとに即刻原因究明や対策の提出を求められる。幹部や安全課の納得が得られるまでは家には帰れない。三日三晩不眠不休のカンヅメにされることもめずらしくはない。上司たちは上司たちでその鬱憤を持ち帰って現場の部下に当り散らしてくる。だから「いらん仕事はするな」というのが製鉄所の現場で働く従業員たちの暗黙の約束事なのだ。勤続五年を過ぎた伸夫にもそのことがどうやら理解できるようにはなっていた。

ミットスイッチという、巻き過ぎ防止装置が利かなくなつたという理由で、電気整備工に連絡して故障の原因箇所を修理してもらっているところだ。これが利かなくなると、入れたハンドルを引っかかりクレーンマンが戻し損ねた時に自動停止しなければならぬはずの電動機が停まらずに、直径二五ミリのワイヤーを巻き切るばかりか、重量物を揚重装置ごと落下させることになる。もちろん重量物の落下によつて分塊工場のシンボルである炉まで壊してしまうのだ。クレーンには五つのハンドルがある。工場の東西に長く伸びたランウェイを移動するトラベル、揚重装置や運転室とともに炉上を南北に移動するクロス、上下移動のホイストの三つの一口蛸の頭のような形をしたハンドルと、旋回、開閉の二つのレバー型ハンドルだ。一連のその操作を自在に捌くのが一人前のクレーンマンなのだ。順調に操

「4号装入機さん、修理はまだ終わりませんか、どうぞ」

控室のスピーカーが鳴った。4号装入機というのは修理している伸夫の受持クレーンのことだ。工程係からのインターホンである。作業を催促しているのだ。いかなる理由があろうとも圧延を三〇分以上停めれば工場長に報告しなければならぬ。そのことが気になるのだ。

「もう少しかかると思います、どうぞ」

「時間的に後どのくらいですか、どうぞ」

「さあ、まだ整備からの連絡がないものですから……どうぞ」

「全然動かすことはできないのですか、どうぞ」

「いや、安全装置が故障しただけですから動かさそうと思えばすぐにでも動かすことはできます、どうぞ」

「だったら一本だけ抽出してくれませんか。夜勤はこの一本出したらキリがつくので後は不熱ということにして後番に申し送ります、どうぞ」

不熱というのは炉に入れた鋼塊が規定の温度に熱されていないということの意味する。何のことはない、人為的に計器をごまかして報告するわけである。こうしておけばさすがのコンピュータも見抜くことができない。何しろ圧延をストップさせることは工場全体の連帯責任になるのだから、そこはうまく立ち回る必要があるわけだ。ヘンな言い方だが職場の人間の知恵もこの件に関してはまだまだコ

ンビューターより優っている。

「はい、了解しました」

伸夫は整備工に確認もとらずにそう言ってしまった。工程係の言うことにいちいち反発してはいけぬ。工程係員はみんな工場の幹部候補生なのだ。どこの工場部門でも入社試験において上位を占めた者から順に工程係に配属されているという噂だった。

伸夫は安全帽を頭にかぶると急ぎ足で控室を出てクレインの昇降タラップを上った。

炉からの熱風が地上一〇メートルに架設されたクレインまで勢よく舞い昇っている。うっかりしていると安全帽を熱風にさらわれてしまいそうだ。伸夫は安全帽の顎紐をきつく締め直した。

クレイン運転室は真冬でも四〇℃は下らない。だから運転室は一年中エアコンの点けっ放しだ。真冬ならまだしも真夏にもしもエアコンが故障でもしようものなら運転室はたちまち灼熱地獄と化す。三〇分も入ってはいられない。三ヶ月前、伸夫は一回だけエアコンの故障で熱中症になりかけたことがある。頭がボーっとしてきて体が震え出した。あわてて運転室から脱出しようと椅子から立ち上がった。よろけてしまい、腕まくりした肘が、焼けたドアの鉄の部分に触れて焼けどした。皮肉にもそのショックで彼は意識を取り戻し、熱中症は免れた。その代わり、圧延を三十分

ない。そんなことはよくあることだ。伸夫はクレインの機体の通路を歩いて周り、もう一度大声で整備工の名前を呼び、返答がないことを確かめると「掛札」を外して主スイッチを投入した。それから畳二枚分の広さもないクレイン運転室に乗り込むと、回転式の丸椅子に腰かけ、操作スイッチを入れて始動のサイレンを短く鳴らしながらホイストのハンドルを「巻き上げ」に動かしてみた。リミットスイッチは復帰している。何だ、やっぱり修理は完了しているではないか。伸夫はそう呟きながら安心して工程係が指示した炉の方向に向けてトラベルを入れる。吊上荷重一〇〇トンのクレインは振動しながらゆっくりとしたスピードで動き出す。エアコンはスイッチを入れたばかりなので熱風のような風しか出てこない。冷風が吹き出してくるまで五分はかかる。それまで室内はさながらサウナ風呂だ。たちまち伸夫は額や首筋から汗を流し始めた。

溶鉱炉の主原料として鉄鉱石やコークス、あるいは石灰石、マンガン鉱石などの副原料が投入されて高熱で溶融された製鉄は溶銑のまま製鋼工場に送られる。そして製鋼工場の転炉に移されて屑鉄や蛍石などを混ぜ合わせた後、純酸素を吹き込んで精錬して鑄型に流し込み、造塊した物が分塊工場に搬送される。その鑄型を抜き取った後の重さ四〇トンの鋼塊は、外側が空気に冷却されて固まっているように見えるが、内部はまだ溶融状態にある。圧延機に

も停めたという理由で職制からたつぷりと絞られた。こんな時のために予備のエアコンが備え付けられているのだが、実はその予備のエアコンも故障したままだった。誰か請負業者に連絡してくれるだろうと思っていたのだが、誰もがほったらかしていた。予備のエアコンが故障していたことは三交替の申し送りでも伸夫も知っていた。したがって伸夫だけの責任ではないにしてもその怠慢を彼だけがきつく責められた。もちろん腕まくりして焼けどしたことも。ちなみに製鉄所構内の作業遵守項目として腕まくりは禁制事項の一つに上げられているのだ。伸夫はあの時のことを思い出すだけでも背筋を凍らせた。

伸夫は運転室に入る前にスパン三〇メートルのクレインゲーターにある長い箱型をした配電盤室に入った。そこも焼けただけたような熱気が室内いっぱいにももっていた。電気整備工はそこで修理をしているはずだった。しかし、入ってみるとそこには誰もいなかった。どこに行っただろう、おかしいな、と伸夫は呟きながら辺りを見回し、「松藤さーん！」と大声を上げて電気整備工の名前を呼んだ。

が、やはり返事は聞こえない。配電盤のスイッチ関係は全部オフになり、主スイッチボックスには「修理中」の掛札が掛けられたままだった。松藤は修理を終えた直後に緊急呼び出しでも受けて別のところに行かされたのかもしれない。かける前に上部二方向燃焼方式の炉に立てて入れ、鋼塊の外部を約四〇分間かけてバーナーから燃料ガスを吹き込んでゆるやかに加熱し、鋼塊の内外の温度を均一にする。加熱温度は用途によってまちまちだが、普通鋼で一三〇〇℃が目安だ。加熱が終ると上方の炉蓋を開けて熱塊と化した鋼塊を揚重装置のスピンドルの先に付いたトンゲという巨大な閉閉式の挟みで掴み上げ、圧延場まで運ぶのが伸夫の乗っているクレインの役目なのだ。伸夫はインターホンのスイッチを押した。

「工程さん、準備OKです、どうぞ」

「はいはい、只今蓋を開けます」

短いサイレンが鳴って炉蓋が開き始めた。白色に近い太陽色の炉中から火の粉がゴーツというガスの燃焼する音と共に飛散し、熱風が勢よく舞い上がる。まるで地獄の釜だ。炉の中を囲った耐火レンガまでが焼けただけ、熟したトマトのような色を呈している。やがて炉底に垂直に立った黄金色の熱塊が現れた。一つの炉には二〇本の鋼塊が入るが、開いている炉には一本しか残っていなかった。この一本の熱塊を運び出せば、新たに貨車で牽引されて来た鋼塊を別のクレインで炉に運び入れることになる。伸夫は紺色よりもっと濃い色つきの二〇ミリの厚さの遮光ガラス窓から一〇メートル下の炉の中を覗きながらトンゲを開いて四〇トンの熱塊を挟み、吊り上げた。火の粉が怒ったよ

うに熱塊から飛び散る。遮光ガラス越しだとは言え光線が仲夫の疲れた目には眩しい。見慣れていてもつい顔を背けたくなる。その瞬間だった。あつと仲夫は思わず声を上げていた。

丸めたウエスのような物体が開いた炉の中に落ちたのだ。落下物は炉の中でボンと弾ける音を立てたかと思うと煙とも蒸気ともつかぬ白いものを激しく上昇させ、すぐに光線に同化するように消滅した。クレーンを掃除した後には機体のどこかに誰かが置き忘れていたウエスだろう。よくあることだ。仲夫はそのまま熱塊を吊り上げて走行し、キッパという台車を小さくしたような運搬車の上を下ろす。ゴックンという音響を残して熱塊は遠隔操作のキッパで送り込まれ、秤量機で目方を量られる。それがすむとさらに圧延機前面へ送り込まれ、ついでキッパに備え付けられた五寸角の電動式金属棒で押し出され、回転している二本のロールに噛み込まれる。そして粗い粒子状態の鋼塊の材質を強くするために何回も厚みの違った上下のロールの中をくぐらされながらその圧力で細く長く伸ばされ、地響きのような大音響とともに細かな粒子の鋼片として寸断されて生産工場へ搬送されるのだ。

熱塊の抽出が終わった炉はすでに蓋を閉じている。地上一〇メートルのクレーンから見下ろすと、炉の上部は金属で区切られた巨大な長方形をした平面にしか見えない。知

せずに小柄な体を傾けるようにして仲夫を凝視する。後三年で定年だ。

「はい。確かに……」

「確かにって、君は修理に立ち会っていたんじゃないのか」

「最初は立ち会っていましたが、時間がかかりそうでしたので控室に待機していました」

「待機とは？」

整備係長が口を挟む。もうじつとしてはいられないという仕事で腰を浮かした。眼鏡の中の目が血走っている。

「あ、はい、修理がすんだら松藤さんが連絡すると言ってくれたので……」

「連絡はないままなのか」クレーン係長は目がかすむのか手の甲で目の周囲をこすった。

「そうです」

「ではなぜ君はクレーンを動かしたんだ」

これは整備係長である。神経質そうに口を開くたびに目をしばたかさせている。

「はい、それが待機しているうちに工程から作業要請があったものですから……」

「その時、リミットスイッチの修理は終わっていたんだな。確認したんだな」

クレーン係長が言いながら唾を飛ばした。

らなければ炉の深さが四メートルもあるとはとても想像できない。それが工場のおよそ一〇メートルの長さの建屋に八つ順序よく並んでいる。炉の周囲には銀色の配管がくねくねと走り回っていて、この配管から建屋裏にある直径一〇メートルの球形をしたガスタンクから液化天然ガスを炉に送り込むのだ。燃焼後の廃ガスは左右下方の加熱室を通って直径三メートルの巨大な煙突から吐き出される。炉蓋が閉じられても、燃焼するガスの音はさながら見たこともない怪獣か何かの軀のように聞こえる。間もなく空になった炉には工場外に待機している鋼塊が貨車で押し込まれ、クレーンで運び込まれることになる。作業はこの繰り返しだ。

電気整備工の松藤仁が現場に出たまま戻らないという整備係からの構内電話を受け、仲夫たちは現場の会議室に集められた。整備係員たちも集まっている。どの顔も沈鬱な表情を隠せない。普通なら仕舞風呂呂に入って夜勤の疲れを流しているころだ。

「秋野の所持クレーンで修理をしていたのは間違いないな」椅子には掛けずに腕組みをしたまま突っ立っているクレーン係長がいきなり仲夫に言葉を投げた。密閉式の会議室だが、騒音は容赦なくガラス窓越しに入り込んでくる。係長の目の端にはヤニが付着している。それを拭おうとも

「一応……はい」

「じゃあ、スイッチボックスの『修理中』の掛札は一体誰が外したんだね？」

整備係長が顎めつ面で仲夫を見下した。仲夫の顔は引き攣っている。

「それは——」と口ごもっている時、仲夫のその言葉尻を奪うように応えたのは本田章吾だった。

「それは松藤さんです」

どよめきが湧きおこった。仲夫は思わず声の方に首をねじり向けた。仲夫と本田は同期の入社だったが、親しいという間柄ではなかった。彼とは同じ独身寮に入っているが、どちらかという本田は人付き合いも良い方ではなく、職場でも孤独感さえ漂わせていた。その本田が自分との関わりのないことに容喙ようかいしたものだから周囲の誰もが一齐に彼に目を注いだ。本田の思わぬ援護に仲夫の張りつめていた心は少しやわらいだ。

「君が立ち会ったのかね」

整備係長が眼鏡越しに本田を睨めつけた。

「いえ、おれは隣の建屋のクレーンから見えました」

「見ていた？」

「はい、仕事が一段落したので運転室の外に出て眠気覚ましので体操をしていたのです。その時、松藤さんが安全帽を脱ぎ、タオルで額の汗を拭きながら主スイッチボックスの

脇に立っていました」

「一服していただけなのじゃないのかね」

「いいえ、ぼくと目が合ったのです。で、ぼくが両腕で×印を作って示しますと松藤さんも×印で応えました」

「つまり終わったという手合図を君に返したんだね」

クレーン係長はそう言いながら自分も両腕で×印を作った。

「そうです」

「だからと言って『修理中』の掛札を勝手に外したことはならないじゃないか」

これは整備係長である。細身だが背は高く、学生の頃は剣道をしていたとかで姿勢もよかった。しかし、クレーン係長よりも一回りほど若いくせに頭の中央付近は何ものかに窺り取られたようにきれいに禿げていた。

「確かにそうです。しかし、常識で考えれば修理が終わった『修理中』の掛札は必要ないじゃないですか。修理が終わったにもかかわらずいつまでも『修理中』の札を掛けている方がむしろ問題ですよ。だから松藤さんが外したと考えるのが自然じゃないですか」

「だって安全作業の接点協定書では二者の立会いで掛札の掛け外しは行なうことになっているんだらう」

「そいつは松藤さんに聞いてみないと分かりませんが、ぼくはこう思います。松藤さんが両腕を伸ばして示した×印

いつも入用門で人や車両の出入りをチェックしている彼らのことだからそれは自信を持って言えることのようにだ。

仲夫は鉄板で胸を圧迫されるような重苦しい思いから逃れることができなかつた。

三日が過ぎても松藤仁は行方不明のままだった。

松藤はどこへ失踪したのか。彼には妻と三歳になる女兒がいて住宅に住んでいるのだが、その家族に聞いてもまったく心当たりがないと言う。ひょっとしたら北朝鮮に拉致されたということも取り沙汰されたが、出入りの厳しい製鉄所構内から出て行った形跡はない。となると――？

仲夫は思わず息を呑み込んだ。ウエスのように丸めた物体が一三〇〇℃の炉の中に落下した光景が脳裏に浮上してきたのだ。何秒だったか。いや、何秒もない。コンマ何秒、つまり瞬きしていたら見逃してしまうほんの一瞬だった。あの瞬間は仲夫以外に目にした者はいないはずだ。落下した物体はウエスではなく松藤の体だったとしたら――。その光景が仲夫の目蓋の裏で黒い星となって蠢いている。

一三〇〇℃の炉の中に落ち込んだら人間はどうなるのか。これまでに炉の中に飛び込んで自殺した従業員がいたということは先輩たちから聞かされて仲夫も知ってはいた。が、その時の様子を目にした者は誰もいない。あの白い煙か水蒸気として舞い上がったのは何だったのか。そのことだけ

を見て、ぼくが領いたものですから松藤さんはそれをぼくが立ち会ったと誤解したのではないかと……と」

「そいつは問題だ」

整備係長がクレーン係長を振り向いた。

「そんなことよりも松藤さん本人を捜すのが先じゃないですか」

誰かが後ろの方から眠気を打ち払うような大声を放った。そうなんだ。当人がいないでは話にならない。まさか黙って製鉄所構外に出て行ったわけでもあるまい。彼の同僚がさっきから何回も携帯に電話するらしいが通じないと言う。電波の届かないところに雲隠れしているのか。もしもそうであったとしても理由が分からないのは仲夫ばかりではないか。自分たちが捜すにしても雲をつかむようなものではないか。こうなったら従業員を管理する労働保安課の方に連絡して捜索を依頼するしかなかった。それでも手に負えないなら警察に依頼するより他はない。が、構内で発生した出来事は外部には頼らないのが鉄鋼帝国と言われたY製鉄所のやり方なのだ。製鉄所構内には社員や協力会社の従業員合わせて八万人の人間が働いている。構内はいわば自治区みたいなものなのだ。

依頼を受けた保安係員たちが三台のパトロール車を走らせ広大な製鉄所構内を隅から隅まで捜したが、松藤の姿を見つけ出すことはできなかった。構外に出た形跡もない。

はしつかりと仲夫の脳裡に焼きついている。

その後、炉の中でどうなったのか。彼がその後に見たものはといえば、いつだって目にすることができる太陽の色をした眩しいばかりの光線の束でしかない。落下物は一三〇〇℃の炉の中で光線になってしまったのか。骨まであの光線に消滅するはずはない。けれども、彼の残像の中からは光線以外に何も捜し出すことはできない。彼が目にした物が果たして人間だったかどうかも定かではないのだ。仲夫の記憶もたった三日の間に曖昧になっている。だからうかつなことを言ったらとんでもない災いを招くことになる。余計なことは言い出すな。黙っていれば松藤は行方不明者、もしくは失踪者として処理されることになる。いつだったか、鉄鉱石を積んで寄港した外国船の船底に潜り込んで国外脱出を成功させた者もいるくらいだ。松藤が最近英会話教室に通っていたということが判明してからは、或いはそれも否定できないという噂が飛び交っている。したがって炉が停められることもないだろう。完全に炉の中が冷えてしまうまでには丸二日間はおかる。姿を消したたった一人の整備工を捜すためにそこまで誰が言い出すことができるだろうか。おそらく誰も言い出せないにちがいない。会社にとっては炉をたった一時間停めただけで数百万円の損害になる。仲夫たちは厳しく会社から教育されている。

もしも誰かが垂れ込んで新聞沙汰になり、社会問題化したところでどうということはない。炉の中から何か発見されても、前例を持ち出すまでもなく松藤は自殺扱いになることだろう。そして新聞社に垂れ込んだ者は、当然のことながら他地区へ配置転換か、さもなくば協力会社への出向だ。その者が定年するまで何かにつけて浮かべられることはない。社員履歴に鉄鋼帝国の重い十字架を背負わされることは明白なのだ。伸夫の胸を冷えた汗がぬるりと滑り落ちた。

その日の夕方、独身寮の五階にいる本田章吾が最上階の七階の伸夫の部屋にやってきた。食事に行こうというのだ。伸夫もそろそろ空腹を感じていた。同じ寮に居ながら本田と連れ立って食堂に行くのはめずらしかった。二人はエレベーターで降りる。

食堂は一階にあった。七〇〇人の独身者がこの寮で生活している。夕食時になるとちよつとした人気レストラン並みの混雑を醸し出す。食堂に足を踏み入れた時からカレーの匂いが充満していた。

「今日もまたカレーかよ」

本田は食堂の入口の掲示板に下げられている自分の食券を外しながらまんざらでもなさそうな顔を伸夫に振り向ける。食堂の窓から駐車場が見えた。寮生の半分近くがマイ

たならば、伸夫の業務上過失は免れない。それを本田が真相を曖昧にしてくれたことになる。

「秋野さあ、お前に頼みがあるんだ」

本田はタバコを唇に挟みながらライターで火を立てた。

「頼み——何だ？」

伸夫は思わず背筋を伸ばした。胸の中を本田に覗き見られたような気がした。

「少しカネを貸して欲しいんだ」

本田は拗り上げるような目付で伸夫を見た。伸夫はぎこちなく笑いながら首を横に振った。

「おれは他人に貸すカネは持たん。実家が貧乏百姓だもんだから送金してやらないかんのさ」

「そんなに冷たいこと言わんでくれ。おれだってお前を助けてあげたじゃないか」

お前を助けてあげたじゃないか、と言う本田の言葉を耳にした時、伸夫の頬の肉が一瞬引き皺った。それを本田が見逃すはずもなかった。伸夫が黙っていると、本田は上唇を舌で濡らしながら続けた。

「なあ、おれとお前は同期生なんだからさ、困った時にはお互いに助け合おうじゃないか。三〇万円、頼むよ」

「三〇万円！」

「次のボーナスから少しずつでも返すからさ」

「そいつは無理だ。一〇万円だったら何とかなるけどとて

カーを所有していた。

ごはんにカレーを盛った大皿を「おさんどん」と称する若い女寮務員から受け取るとトレイに乗せ、らつきようと福神漬を小皿に取り、テーブルにつく。何杯でもお代わりは自由だ。

すでに先着の寮生たちが陶器に触れる匙の音を響かせながら口の中に掻き込んでいる。寮生のほとんどはカレーが好きだった。だから一週間に一度はカレーライスかカレーうどんだった。

夕食を食べ終わると、伸夫は本田に引つ張られるようにして屋上上がった。空はまだ明るい。屋上にはベンチが置いてあり、フェンス越しに見る鉄都の景色は目を見張らせるものがあった。特に工場の夜景が素晴らしい。昼間は燻ついても夜になると百万ドルの夜景と言われるほど眩い丘の上に建っており、工場のほぼ全貌が見渡せるのだ。

ベンチに腰を下ろすと、伸夫はさつきからなぜ本田が夕食に自分を誘ったのかを考えていた。確かにあの日、伸夫の有利になる弁護を本田がしてくれたことには感謝している。彼の口出しがなかったら伸夫の接点協定期違反が浮き彫りにされるどころであった。あの日、松藤がクレインのどこかにいたとしたら、そしてそれを確認せずにクレインを動かしたことによって松藤が仮に炉に転落したと考え

も三〇万円は——」

「それが三〇万円、どうしても必要なんだ。なあ、頼むよ。

……あの時さあ、おれは嘘を言ったんだ」

伸夫はまた頬を引き皺らせた。

「覚えていられるだろう。ほんとうは松藤さん、修理を終えて工具などを片付けて建屋の外側の通路の涼しいところに出て涼んでいたんだよ。いきなりサイレンが鳴ったものだから松藤さんは慌てて内側へ戻り、昇降タラップに足をかけてクレインに乗り移ったが、機体が動き始めたものだから手摺を掴む間もなくよろよろとしているうちに墜落したのだ。おれは全部見たよ」

嘘だ、と伸夫は思った。クレインを動かす前に伸夫は機体の隅々まで見て周っている。その時、松藤がクレインから降りて建屋の外側の通路に出たとしたら、彼を捜している伸夫が気付かないはずはない。その辺りにも声をかけたのだから。

「おれを疑っているのかい？」

「いや、そうではないが、おれだつてクレインを動かす直前には確認したんだ」

「それはそうだろう。だけど松藤さんは墜落したんだぜ。まっ逆さまに炉の中に落ちたんだぜ。次の瞬間には松藤さんの姿はおれの視界からも消えていなくなったんだ。炉を停めて調べてみれば分かるさ。遺留品の一つくらいは見つ

かるはずだぜ」

「本当に見たのか」

「やはりおれを疑っているんだな」

「では聞くが、あの時なぜみんなの前であんなことを言ったんだ？」

「お前を助けるためだよ。いけなかったのかい。それが気に食わないって言うんなら訂正しても構わないんだぜ。『修理中』の掛札を外してクレーンを勝手に動かしたのはお前なんだよな。そのために松藤さんは炬に落下したんだよな」

伸夫は黙り込んだ。腋の下を生ぬるい汗が這っている。

「どうしたんだよ」

本田は二本目のタバコを銜えていた。伸夫は姿勢を正してやおら本田の肩に手を乗せた。

「分かった、三〇万円は明日まで待ってくれ」

「いいとも。貸してくれるんだな」

とたんに本田はハエのように手をすり合わせ、大げさに頭を下げた。それを目に認めると伸夫の顔にはばかばかしいとしか言いようのない安堵の表情が浮かんだ。

翌日、伸夫は社内預金から三〇万円を引きおろした。結婚資金として給料から天引きで貯めているが、当分はまだ独身でいるつもりだった。それまでに返してもらえばいい。

本田が再び寮の伸夫の部屋にやってきたのはそれから

「もうおれの預金はこれで空っぽだ。これ以上は貸したくても貸せない」

本田はあと五万円ほど残っていたが、これだけは手元に残しておかなければ、いついかなる理由で必要になつてくるかわからないではないか。

「すまん。恩に着るぜ」

本田はそう言っているものの元気な姿に戻って伸夫の視界から消えて行つた。

それからまた一週間も過ぎた頃、本田は浮かない顔して伸夫の部屋にやってきた。

「すまん、もう一〇万円とかならないか。あと一〇万円払わないとオヤジは治療を打ち切られ、強制退院させられるのだ。無理言つて申し訳ない。この通りだ」

本田は部屋の上がり口で蛙のようにひれ伏した。どこで呑んできたのか、アルコールの臭いを漂わせている。

「やめろ、そんなマネは」

伸夫はそんな同僚の姿は見たくもなかった。同情を誘うつもりだろうが、その手には乗らない。彼に對してこれまで信用してきたことが音を立てて崩れるような気がした。

「もう一回だけ何とかしてくれ、頼むぜ」

本田は哀れな声を出している。

「本田、本当のことを言ってくれ。おれから借りた金は一

ヶ月後だった。本田は菓子箱を手を下けている。借金の
お礼のつもりらしい。それにしても本田の顔色は冴えない。
いつもの本田とは違っていることに気付いた伸夫は、渡さ
れた菓子箱を受け取りながら言った。

「どうしたんだ？」

「いやあ、どうもこうも……」

本田は躊躇うように首をゆっくりと横に振った。

「何かあったのか」

「うん……」

本田は言いにくそうに顔を歪めた。こんな本田の顔は見
たことがなかった。余程何か困ったことが生じているのか。

「お前に三〇万円借りただけど、まだ足りないんだ」

「まだ足りない！ 一体、何に使うんだよ」

「それがさ、親父が肝臓癌で入院しているんで、その入院
費なんだ」

「癌……！」

「お前に迷惑かけて悪いけど、あと一〇万円都合してもら
えないか。借用書は書く」

本田に困っている様子だったので、伸夫は露骨に舌打ち
しながらもついつい頷いてしまった。もしも断ればあの
ことを持ち出すにちがいない。もう嫌だ。

翌日、伸夫は約束どおりにまた社内預金から一〇万円を
引きおろして本田に渡した。

体何に使ったんだ？ まさかギャンブルか何かに使ってい
るのではあるまいな」

触れただけで弾けてしまいそうなほど張りつめた気持ちが
口に出た。

「違う違う、親父の治療費だよ、この前言ったじゃないか。
とにかく病院から催促されてお袋が困っているんだ。何と
か頼むよ」

「無理だ。他の人に当たってみることだな」

「そこを何とか」

「ダメだ」

「どうしてもダメなのか」

「これ以上は貸すカネがない。おれの預金は完全に空っぽ
になったって言ったはずだ」

それを耳にすると本田はやおらズボンの埃を払いながら
立ち上がり、不気味なほど伸夫に顔を寄せ、態度を豹変さ
せた。

「そうかいそうかい、そんならあの件、言いふらしてもい
いんだな。おれはそういうつもりではないんだが、頼みを
聞いてくれないとなるとおとなしく引き下がれないんだよ
な。そうさ、おれにだって正義ってもんは授かっているん
だよな。……警察の取り調べを受けることになつてもいい
のかい」

本田は鼻の上に皺を寄せ、不敵な笑みさえ顔に浮かべて

いる。伸夫は思わず身震いして彼の顔から目を逸らした。脅して言っているとはかりには思えない。断れば本田は本気で警察に垂れ込むつもりだろう。警察でなくても誰彼なく言いふらせば安全課の耳にも入るだろうし、やがて警察にも届くだろう。

「待ってくれ」

伸夫はそう言葉を吐いてしまった。彼は自分の声に驚き慌てて声をすぼめた。「おれの預金はほんとうに空っぽだ。しかし、明日の夕方までには一〇万円は何とか用意する。ただし、もうこれつきりにしてくれ。な、これつきりだぞ」本田の頬がにわかには弛むのを目に認めて伸夫はほっと胸を撫で下ろした。

「いいとも。明日の夕方だな。じゃ、アテにしているぜ」

本田はそう言うのと、軽く手を振って部屋を出て行った。伸夫は大きな溜め息を吐き出してベッド上に座り込んでしまった。アテにしているぜ。本田が言ったその言葉が伸夫の脳裡で反復され、重たく彼にのしかかる。冗談じゃないぜ。そう言い返したい。しかし、できなかった。このままずるずるとおれは本田の餌食にならなければならないのだろうか。伸夫は頭を抱え込んだ。あの時のことを思い切っ上上司に打ち明けてみようか。故意にやったわけではないし、警察の取調べを受けるにしても過失なら会社をクビになることもあるまい。もっとも松藤が伸夫のせいで墜落し

くれないだろう。後のカネをどうするか。実家に行ってもカネを無心できるわけではないし、兄弟にも言い出せないならサラ金に頼るしかないだろう。しかし、なぜ彼がそこまでしてやらなければならぬのか。考えれば考えるほど腹が立つてくる。相手は貸してくれと言っているが、貸したカネを返してもらえるかどうか。借用書は書いてくれるがその保証はない。彼にとつては借用書なんて紙屑と同じだろう。となると、自分は本田の金ヅルでしかないのか。伸夫の気持は揺れた。もうどうにでもしてくれ、という気持も一方には湧いた。しかし、本田には約束してしまったのだ。彼の頼みをきっぱりと断ることはできない弱さを持つ自分が情けなかった。伸夫は机の抽斗から社内預金通帳を取り出して目の前に広げる。残高が増えているはずもなかった。全部引きおろしても約束の金額には満たない。もっとも、これを全部引きおろせば彼は無一文になる。これだけはどんなことがあっても手を付けたくなかった。

伸夫は昼出の出勤前に会社の通用門のすぐ近くにある「マルエス金融」と金色の文字で書かれたガラスドアを押した。ここなら保証人不要、Y製鉄所の社員なら通門証だけで貸してくれることを彼は知っていた。高利にはちがひなかるうが風評にあるような悪質なことはしないということも知っていたので、かなりの社員たちが利用していた。

三つの窓口にいるのはみんな紺の端正な服装できれいに

たという証拠は何もない。今のところ行方不明のままだ。唯一目撃したというのは本田だけだ。しかし、本田はあの時、みんなの前で違ったことを述べている。彼の発言で松藤は行方不明ということになった。ここで彼がああ発言を翻せばどういうことになるのだろうか。彼の言葉をまるまる信用はしないにしても一応は炬を停めて証拠品を調べるぐらいはすることになるだろう。炬の中には松藤の遺留品の一つくらいは残っているかもしれない。骨の一片でも見つければ伸夫は参考人として警察の取調べを受けることになるのだろうか。労働基準監督署も乗り出してくるにちがいない。よしんば過失ということになったとしても平常通りに勤務することができるとか。そのことが彼の経歴についてまわるからにはいくらまじめに働いても昇給も賞与も最低だろうし、昇格の機会も与えられないにちがいない。これでは重い影を背負わされて生きていくようなものだ。ささやかな希望という光さえも彼の行方に射すこともあるまい。今まで経験したこともない激しい感情が、伸夫の体の中でゴボゴボと溶銃のように音を立てながら今にも迸りそうになるのを感じた。

伸夫はいつまでもベッドの上に座り込んでいたが、やおろ氣を取り直して立ち上がると、押入れを開いた。夏用と冬用の背広が二着ある。明日まで待ってくれ、と本田には言ったが、これを質屋に持って行っても一万円も貸しては化粧した若い女性たちだった。伸夫は手招きを受けて空いている一番奥の窓口に向き、椅子に腰を下ろして担当者に向かい合った。金縁眼鏡をかけた担当者ははつきり営業用と分かるような笑みをこぼしながら伸夫に身分証明証の提示を求めた。伸夫は社員通門証を胸のポケットから取り出して彼女に差し出した。

「Y製鉄所にお勤めなんですね」

「はい」

「ちよつとお借りしてよろしいですか」

彼女はそう言って肩まで垂らした髪を左右に小さく振るようにして奥の部屋に消えて行った。たぶん、人事課にこの人物が在籍しているかどうか電話で確かめているのだろう。やがて戻ってきた彼女は伸夫に社員通門証を返しなから言った。

「カードはお持ちですか」

「いや、持っていない」

「カードを一度お作りしていただければ後は当方備え付けの『無人君』でいつでも自由にご利用いただけるようになります。便利です。お作りしておきましょうか」

「いや、結構」

「分かりました。では今回おいくらご用意しましょうか」

「一〇万円お願いします」

「三〇万円まで融資できますけど」

「いや、一〇万円で結構です」「かしこまりました」

彼女はそう言って書類を仲夫に差し出し、住所や氏名等の必要事項を記入捺印後、別の用紙を差し出して返済の方法とか金利の説明をした。金利も2.9・2%なら法定内らしい。彼は細かく確認もせずに現金を受け取ると、もっともらしくお辞儀をする担当者後に「マルエス金融」を出た。

翌日の夕方、早速本田が仲夫の部屋にやって来た。

「や、たびたびすまん」

仲夫は「マルエス金融」から借りて来た一〇万円をそっくり本田に渡した。

「もう本当にこれつきりにしてくれ。これ以上はどんなに頼まれても貸せない。これも借りて来たものなんだ」

「そうか、すまん。でもよ、お前には貸してくれるところがあるからいいよな。おれなんか貸してくれるところもありません。だから悪いと思いつつもお前に頼るしかないってわけさ。うん、必ず返すよ。今はオヤジの治療費に借金しているが、オヤジが死ねば生命保険が入ってくるようになっていし、利子つけてみんなまとめて返すさ。……お、そうよ、安心しろ、あのことは誰にも言わないさ」

そう言って細い目を一層細め、機嫌よく仲夫の部屋を出て行くとする本田の腕を取り、仲夫は言った。

が滞っているのか、まったく通じない。

カネが入ったこととどこかで遊び呆けているのだろうか。その後も仲夫は何回も本田の部屋に行ってはノックを繰り返したが帰った様子ではなかった。

翌日も本田は無届欠勤で休んだ。

このまま彼が無届欠勤を続けて製鉄所をクビになってしまつては貸したカネは返してはもらえなくなるかもしれない。何としても本田を捜さなければならぬ。そう考えた時、仲夫はふと本田の実家に行ってみようと思つた。彼の実家は筑豊だと聞いている。父親が癌で入院していると言っていたので、もしかしたら父親にのっぴきならぬ何事かがあつて実家に帰っているのかもしれない。帰つていないにしても、親たちが彼の行方を知っているのかもしれないし、彼の父親がほんとうに癌で入院しているのかどうか確かめることはできる。

仲夫は寮の事務所に行き、寮生名簿から本田の実家の住所を教えてもらった。やはり筑豊に間違いなかった。本来ならこういう個人情報の開示できないことになっていたが寮務主任に事情を話すと、寮でもサラ金らしき業者からの電話が頻繁にかかることから本田の様子が気になっていたらしく、頼むよ、と言って本田の実家である閉山した炭坑の社宅跡の住所と入寮時に本田が描いたらしい略図をコピーしてくれた。

「お前さ、何か重大なことをおれに隠しているんじゃないのか」

本田の顔が急に歪むのを仲夫は見逃さなかった。「言ってみろよ」

「心配するな、お前には関係ないよ」

本田は仲夫の手を振り切つて仲夫の視界から消えた。

翌日、本田は昼出の午後二時出勤の勤務を休んでいた。

しかも無届である。親父の具合でも悪くなったのだろうか。仲夫が心配していたら、ギャンブル狂で通っている楠田という仲夫よりも一つ若いのが、休憩時間にこんなことを言つた。本田さんは昨日、若松ポートレース場に来ていて、大穴を当てたと言つて札束を見せてくれました、と。百万円以上はあつたのではないかと。やはり本田は仲夫から借金してギャンブルに使つていたので。仲夫はそれを耳にして歯ざしりした。親父の治療費とか言つて彼を騙していたのだ。まるまる彼の言い分を信用していたわけではないうが仲夫は腸の煮えくり返る思いがして食べかけの弁当を残飯入れに捨ててしまった。

勤務が終わつて帰宅するや仲夫は本田の部屋に直行した。しかし、ドアは鍵で閉ざされていて何回ノックしても何の応答もなかった。仕方なく携帯を取り出して彼の番号にかけてみたが、いつものように電源が切られているのか充電

仲夫は定休日を待つてJR鹿児島本線でK駅まで行き、日田彦山線に乗り換えて、かつては炭坑景気で賑わつただろうS駅で降りた。その駅も今は寂れて無人化している。

もらつたコピーの略図を手に二十分ほど歩いた。と、標高百メートルほどの、かつてはボタ山であろうと思われる巨大な握り飯の形をした三角形の山が連なつて見えた。今は雑木が生い茂り、その雑木も紅葉し始めていてとてボタ山だとは信じがたい光景を見せている。ここで掘られた石炭も仲夫が勤めているY製鉄所コークス工場の原料として大量に運ばれたことであろう。そのふもとに古い家並みが続いており、どうやらそこが本田の実家の住所となつていた。この辺も炭坑の最盛期には相当賑わつていたところなのだろうが、今は近くにコンビニが一軒あるだけで、新しい建物はほとんど見かけなかった。

その家並みを伝い歩いてガラス戸の入り口の黒っぽくて薄っぺらな表札に「本田」とマジックで書かれた家を探し当て、仲夫は人の指で汚れたような呼鈴を押した。周囲が静かなので部屋の中で呼鈴がピンポンと鳴っているのが外でも聞こえた。ちょうど昼飯前のように、別の方角からメザシか何か魚を焼く匂いが漂ってきた。ああ、いい匂いだと仲夫が呟いたその時に半分白髪になった女性が怪訝な顔で玄関に現れた。細い目が本田に良く似ているところか

ら彼の母親にちがいがなかった。母親は自己紹介した仲夫を息子の寮の友達だと知ると少し頬を緩めて頭を下げた。

「章吾君、帰って来られませんか」

仲夫は勧められるままに玄関を入って上がりかまちに腰を下ろした。

「いいえ、帰つたらんです。章吾が何か……？」

「いや、大したことはないのですが、会社で急に章吾君が見えなくなったものですから捜しているんですよ」

「ま、そげんことですか。章吾は主人が死んだ後、一度だけ帰って来たんですけどつてんまたすぐ出て行ったきりです。それ以来戻っておりません」

「えっ！ お父さんはもうお亡くなりになつていたのでですか」

「そうそう、肝臓癌ですたい、手遅れやつたですけんね。もう一年前です……。章吾はようしてくれました。私らが貧乏しているもんですけん、主人も章吾を頼りにしとりました。章吾のお蔭でどうにか世間並みの葬儀も出すことができましたとです」

本田の母親は皺の多い顔を気の毒なほど歪めて仲夫に涙を見せた。

「すると章吾君はお父さんの治療費なども——」

「そうですたい。章吾が支払ってくれました」

「失礼ですがお父さんの治療費を章吾君が友達やサラ金か

そう言われて仲夫は怪訝そうな顔を残して面会室のドアをノックした。

と、そこには見覚えのない中年の男が二人ソファーに腰を下ろしていた。一人は赤ら顔でずんぐりとしており、もう一人は赤ら顔より痩せてはいるが背は高そうだった。生命保険か何かの勧誘員にしては横柄な態度だ。

「秋野仲夫君だね」

赤ら顔が低い無機質な声で言いながら仲夫の顔を無遠慮に覗き込んだ。

「そうですか……あなた方は？」

「労働部調査室の者だ」

仲夫は弾かれたように驚いた顔で「あつ」と叫び声を漏らした。赤ら顔は仲夫に射るような視線を貼りつけている。労働部調査室の係員と言えば社員からは警察官以上に恐れられている。社員の素行や思想調査が主な目的だが製鉄所構内での災害や事故の原因調査も独自で行っている。もう一人の痩せた方も鋭い視線を仲夫に送っている。

「本田章吾の件で調査をしている。ご協力を願いたい。突っ立っていないでここに掛けたまえ」

仲夫は一呼吸おいて「はい」と返事し、彼らと対面する形でソファーに腰を下ろした。

「寮務主任から聞いたよ。本田の実家に行ったそうだが彼のことについて何か掴めたかね」

ら借りて支払っていたとか？」

「そげんことが章吾にありますもんかい」

「お母さんが心配するといけないので借りたとは言わずに黙っていたのでは……？」

「ないない、章吾は他人から借金するような人間じゃなかつた。ましてサラ金なんかに出すような人間じゃなかつた。私も気になつたもんですから章吾に尋ねたのですが、ちゃんんと自分で働いたカネやから心配せんでよかち言うとりました。いくら章吾の友達だからつてええ加減なことは言わんでつかあさい」

親は何も知らないのだ。お母さん、あなたの息子さんは私から何回もカネを借りているんですよ。そう喉まで出かけた言葉で仲夫は必死で呑み込み、大きく溜息を吐いた。「もし章吾君が帰つて来たら私に連絡するように伝えて下さい」

そう言い置いて母親の返事も待たずに仲夫は本田の実家を後にした。結局、本田の行方は掴めなかつたが彼の意外な面を垣間見たような気がした。

帰寮すると寮務主任は彼を待っていたかのように手招きして隣の面会室を指差した。

「君に面会だ。随分お待ちになつている。私への報告は後でいいからすぐ行つてくれ」

赤ら顔がタバコを唇に挟み、ライターで火を点けた。

「いえ、何も……」

仲夫は彼らに詳細を話したくなかつた。話せば協力という形でとことん彼らに付き合わされることになるのを仲夫は知っている。

「立ち寄つた形跡もなかつたということかね」

「そうです」

「うむ、これは参考として聞くわけだが、秋野君、あんたは本田にカネを貸していたそうだね」

「あ、はい」

「いくら貸した？」

「最初三〇万円と後から一〇万円が二度ですから合計五〇万円です」

仲夫は正直に心えた。

「何のための借金か、理由を言っていたかね」

「はい、父親が肝臓癌で入院しているから……と」

「君はそれを信用していたのだね」

「あ、はい。それは事実でした」

「そうか、君は今日彼の実家に行つて来たんだよな。まあ、それはいいとして、本田はサラ金や他からもたくさん借金しているらしいな」

「えっ？」

「君は本田からはっきり聞いたことはないのか」

「そういう話はしたことはありません」

削ぎ落としたような頬を微妙に歪めながら瘦せた方が口を開いた。赤ら顔と違って意外にも甲高い声だった。

「松藤仁が行方不明になっていることは知っているよな」

「あ、はい」

「本田は松藤からも多額の借金をしていたような話は聞かなかったかね」

「えっ！ そんなことは——」

知らないと言ったつもりだが言葉にはなっていないかった。伸夫は驚いた。松藤からまで本田が借金していたなんて想像もしていなかったが、言われてみると伸夫の脳裏に閃くものがあった。もしかしたら松藤に借金返済を迫られた本田が、修理している松藤を目にし、この時とばかりに自分の受け持ちクレーンから横伝いに乗り移って来ていきなりスイッチを投入した、としたらどうなるか。松藤は四〇〇Vの電圧に曝され、感電死は免れてもそのショックで体の自由を奪われ、あるいは驚いてバランスを失い、配電盤室から機体のどこかに吹っ飛ばされて気を失ってしまいうだろう。そこへ伸夫がクレーンを動かしたのだからその振動で松藤の体が落下した……。落下した場所がたまたま炉の中だった、そうでなくても一〇メートルの高さから落下すれば間違いなく即死だ。下は金属製の炉蓋だし、クツションになるような物は何も無い。伸夫には本田の思惑が読め

ている。しかし検証する術がない。……それはそこに置いておくとしてだね、本田には付き合っていた女がいたらしいな」

「さあ？」

「知らなかったのか。風俗店の女だ」

もう一人が貧乏ゆすりしながら割り込んだ。

風俗店の女なら遊んだことはあるだろうが、付き合っていたとは伸夫には意外だった。

「その女はMDMAの常習者だった。合成麻薬だ。死ぬ間際には錯乱状態になっていたらしい」

「死んだのですか」

「自殺だ。アパートの自室で首を括ってな。新聞にも小さく出ている」

それで本田は……。たぶんあの日と思うが、本田は若松ボートレース場で姿を見られている。大穴を当ててすぐ女のアパートに駆け付けたら死んでいたということだろうか。もう一人の調査員が続ける。

「女の母親も本田の父親と同じ肝臓癌で死んだのさ。それまで女は風俗店で母親を助けようと必死になって働いているうちにヤクザにだまされてMDMAにのめり込んだってわけだ」

「本田もバカだよ。ほっとけばいいのに同情して、女を麻薬から立ち直らせようと懸命になって借金までしていたの

たような気がした。

「それも知らなかったのか」

「はい。本田は私には借用証を書いていましたから、松藤さんから借金していたとすれば借用証が残されていると思います」

「うむ、それがあればはっきりするところだが、どこにもない。作業服のポケットにでも入れていたんだろうな。……ところで妙なことを聞くが、君は松藤仁が炉の中に転落したことを知っていて隠していたのじゃなかったかね」

「いいえ、そんなことはありません」

伸夫は激しく横に首を振った。

「正直に言ってくれないか。君が不利になるようなことにはしないから」

「嘘じゃありません」

赤ら顔が吸いかけのタバコを灰皿に揉み消しながら口を挟む。

「あの時——君はそれだけで分かんと思うが——あの時の本田の証言で君の業務上過失は免れたが、そのことを恩義に感じて君は本田から要求されるままにカネを融通してやったのではないのかね」

「違います」

「違う？ まあいい。松藤仁は今のところ行方不明になっているが、警察でも炉の中に落下した可能性は高いと言っている」

黙っている伸夫を二人は無視して話し合い、それから「本田を見かけたら我々に連絡するように」と言い置いて寮の面会室を出て行った。

本田が寮の伸夫の部屋にやって来たのはその翌日の深夜に近い時刻だった。伸夫は昼出の勤務から帰寮し、食堂で夕食を終えて部屋に入って夕刊を広げたばかりの時だった。伸夫が帰るのを彼はどこかで見張っていたようだ。

「どこに行っていたんだ！」

伸夫は彼の姿を目に認めるや荒い言葉をかけた。

「すまん」

本田は黙って伸夫の部屋に上がり込むと茶色の封筒を差し出した。

「何だ？」

「少しカネが入った。ほんの一部だけ」

伸夫がその封筒を開けると、一万円札が十枚ほど入っていた。

「ボートで取ったんだってな」

「楠田から聞いたのか」

「大穴を当てたにしては返済が少ないじゃないか」

「まだ他にも支払うところがあるんだ」

サラ金もその一つだろう。伸夫は昨日調査員から聞いた

ことを口に出した。

「お前、風俗店の女と付き合っていたらしいな」
すると本田の眉間に皺が走った。

「そいつは聞かないでくれ。彼女の事は誰にも話したくない」

そう言った後、本田はポロリと頬に一筋の涙をこぼし、手の甲で拭いた。

「分かった。……それじゃ、残りのおれが貸した分はどうなるんだ」

伸夫は本田から渡された封筒を突き付けた。

「父親の生命保険はどうなった！」

本田は俯いたまま何も応えない。

「お前、松藤さんからも借りていたんだよな」

「うん……」

「まさかお前が松藤さんを——」

伸夫を見返した本田の目が一瞬動揺した。

「言わないでくれ」

「いざれ労働部調査室がお前をたずねてくるぞ」

「それまで黙っていてくれ。……明日から出勤する」

「そうか……。それがいいだろう」

本田は約束通り翌日の午後二時からの勤務に出勤してき
た。更衣室の隣の控室にいるみんなとは離れたところで、

だ、と言って伸夫がホッチキスで閉じられた封筒を開けようとする、開けないでくれ、と本田は言った。

「だったら自分で渡せばいいじゃないか」

「いろいろ事情があるんだ」

「事情って何だ？」

怪訝そうに伸夫が見返すと、本田は片頬をほんの申しわけ程度に笑わせた。と、工程からのインターホンが鳴った。

「4号装人機さん、抽出作業を開始します。炉蓋を開けます。西側から順に運び出して下さい。どうぞ」

「了解」

そう伸夫が応答して炉の真上にクレーンを移動したその時である。本田は暗く沈んだ声で何事か呟いたかと思うと、俯いた姿勢のまま伸夫の運転室のドアを開けると室外に出た。自分の受け持ちクレーンへ戻るのだからと思つて伸夫は運転を停止して顔をドアの方に向けてると、彼はこれまで見せたこともない眼で伸夫に視線を返した。気配を感じて伸夫が操作スイッチをオフにして椅子を立ち上がると、本田はタラップの手摺りを乗り越えようとしているところだった。

「おい、本田！」

伸夫は大声を放つてドアを蹴り開けて外に飛び出し、本田の腰の辺りに両手を掛けたのだったが、間に合わず、本田の体は宙に浮いたかと思うと空気を両手でわしづかみす

俯き加減にタバコを吸っていた。伸夫にほんのちよつとだけ目を向けて頭を下げたがすぐまた俯いてしまった。借金しているのは伸夫だけではあるまい。額の多寡はあつても伸夫の他にも何人かいるはずだ。伸夫はじつと彼に視線を向けていた。

間もなく係長がやって来て始業前のミーティングが始まった。本田の無届欠勤を係長は厳しく責めた。本田は黙つて頭を垂れて聞いていた。

前番勤務者との交替の時間になってみんなが椅子から立ち上がつて控室を出始めた。

クレーンへの昇降タラップ前で前番者とハイタッチして交替すると、それぞれは受け持ちクレーンへ乗り込み、始業点検だ。

「秋野——」

始業点検がすんだところへ本田が伸夫のクレーンへ乗り込んで来た。伸夫は運転室で噴き出した顔の汗をタオルで拭きながらエアコンの冷風を当てているところだった。本田自身も玉の汗を額に這わせている。

「点検はもうすんだのか」

「うん。……お前、俺の実家に行つてくれたんだってな。

お袋から聞いた。実はお前に頼みがあつて来たんだけどさ、これ、預かつてくれないか。お袋に渡してほしいんだ」

本田はそう言つて少し大きな封筒を伸夫に渡した。何

るような格好で、開いたばかりの加熱炉の中に落下していった。そして次の瞬間にはボンと小さな爆発音とともに煙や水蒸気となって消滅した。

それははつきりと目にした伸夫は反射的に、丸められたウエスのような物体が開いた炉の中に落ちて消滅する、あの日の光景を網膜に甦らせていた。あの時と同じだ、と伸夫は思わず口走っていた。その一瞬後、伸夫の目にしたものは炉の中に立ち並ぶ熱塊と燃え盛る真夏のよく晴れた午後の太陽色をした光線だった。本田もあの光線に同化してしまつたのか。彼の目はたちまちその光線に眩んで視力を奪われた。

「4号装人機さん、早く抽出しないと炉の温度が下がります。どうぞ！」

インターホンの苛立った声がクレーン運転室に響いている。

加熱炉が停められ、一日中職場が大騒動になった後、ようやく伸夫は解放されて寮の部屋に帰つて自分一人になった時、本田から預かつた封筒を開いた。と、中に入っていたのは輪ゴムで束ねた二つの髪の毛だった。一つは赤茶けていて細く女のものと思われるが、黒々としたもう一つの直毛は本田自身の頭髮にちがいがなかった。

銀華文学賞特別賞

凍 裂

内耳にこびりついた音が執拗によみがえってくる。
 マイナス二十度を超えるほどの寒さは三月に入ってから
 みはじめていたが、心は依然として凍りついたままだった。
 自分が自分でない感覚。味わったことのない衝動が内部で
 うごめいている。今までの価値観が崩壊し、明らかに別な
 方向へ駆りたてられていた。

この冬のあいだ、私の関心事はひとつだった。バイクが
 坂を上がってくる気配を感じとろうとする。二日おきに午
 後にやってくる郵便配達をどんなに待ち望んだことだろう。
 あのひとの手紙のやりとりだけが今の自分を生につなぎと
 めていたと言っても大げさではなかった。

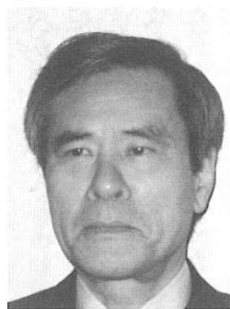
夫がいる身でありながら、封筒に書かれた少しにじんだ
 筆ペンの文字を見るだけで体がふるえてくる。親愛なる及
 川奈美様という普通の書き出しで始まる手紙を何度も読み

受賞の言葉

波佐間義之

銀華文学賞の存在を知ったのは第一回で受賞された、今
 は亡き西村聡淳さんを通じてからであります。その頃、西
 村さんと私は「玄界灘」というちっぽけな同人誌を数人で
 出していました。そんなある日の例会の後、受賞作「筑後
 川彩雲」が掲載された「文芸思潮」を西村さんからいただ
 いて読み、よし自分も、という気になったのがおよそ十年
 前でした。応募一回目の時は二次予選を辛うじて通過、二
 回目、三回目は佳作。七十歳を過ぎてもうこれを最後にし
 ようと覚悟して出した四回目の今回、思いがけなく受賞と
 いう知らせを受け、信じられない気持ちと嬉しさがごちゃ
 混ぜになって胸が震えるような興奮を覚えました。と同時に
 に、まだまだ頑張れば書けるんだという自信を取り戻すこ
 とにもなりました。

五十嵐編集長をはじめ、選考委員の皆さんにこの場をお
 借りして厚く御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございます。
 ございました。



波佐間義之

はざま よしゆき

- 1942 福岡県生まれ
 60 高校卒業と同時に八幡製鉄(株)に
 入社(定年で退職)
 73 「水上街の美学」で第12回新日
 本文学賞受賞
 76 「ツンドラの街」で第8回新潮
 新人賞候補
 2009 「どくだみ」で第3回まほろば
 賞優秀賞
 12 「黒い赤ちゃん」で第6回まほ
 ろば賞特別賞
 著書「貌のない街の碑」(栄光出版社)
 「鈍色の訴状」(あらき書店)他
 第7期「九州文学」編集発行人

高岡啓次郎

返しては物思いにふけてしまふ。私はいつしか周りのも
 のが見えなくなっていた。やがて春が来て北国に明るい日
 差しがよみがえっても、心はもはやこの場所にはなかった。
 そのことで何度も夫と口論になった。おまえの同情心は
 いきすぎている。なぜ、そこまでする必要があるのか。いつ
 たい何の責任があるというのか。経理マンである夫は数字
 と書類ばかりを見つめているに違いない度のきついノンフ
 レームのメガネから吊り上りぎみの神経質なまなざしを向
 ける。左右対称にととのった顔が血の通わない能面よう
 に冷たく感じられた。

私はひと言も答えなかった。もはや夫に対して沈黙した
 石になっていた。日ごとに考えることは家を出ることしか
 なかった。十五年間の結婚生活がたまたまなく虚しいもの
 思えた。おまえは、いったいどうしてしまったのだ。それ

が、何を意味するか分かっていないのだらうな——。夫が背中からかけた言葉をふり切つて、日曜の朝早くに玄関を飛びだした。マンションの通路がやけに長く感じられる。そこに鉄の扉があった。エレベーターホールは放心した私を乗せて暗い淵に落ちていくようだった。

町はずれの丘の上に建つマンションから外にでると、茂り始めた柳の葉影から射す光の点滅が青立ちを高める。春の風はいまだに冬のなごりをのせて容赦なく冷たく肌にしみこんでくる。ジャケットのボタンを首もとまではめて咳をした。

近所の人に会うのを避けて、正規の道はずれて笹やぶを切り開いただけの小道を進んだ。黒ずんだ枝を空に向かって突き立てたカラマツの林を抜け、急こう配の坂をおりると、数軒のモーターがあり、石材店を越えたあたりから徐々に建物が増えていく。やがて視界に街の喧騒が現れた。

慌ただしい交差点があり、大仰にクラクションを鳴らすトラックにおびえながら黄色の点滅から赤に変わつてしまった横断歩道を駆ける。私は周囲の雑踏をいつさい無視して前のみを見つめて歩いてきた。足裏から聴こえてくる無機質な靴音だけを感じながら駅舎に入り旭川駅を經由して札幌に向かう切符を買った。

他に、都市銀行のキャッシュカードや印鑑、それに免許証と書簡の束が入っていた。それは、ここ数か月の間にきた手紙であり、今まさに会いに行こうとしている人物からのものだった。

住所を書いたメモを片手にタクシーに飛び乗った。行先を告げたあとは、どこをどう動いたものか分からない。街の中心部から創成川沿いに北へ向かっていることだけは意識できた。札幌には何度も来たが、篠路という土地は知らない。タクシー代が幾らかかってもかまわないと思った。背負ったリュックには衣類の他に十分な札束が入っている。車中ではじつと自分の手ばかりを見ていた。やり場のない不安が周りを見えなくしていた。まもなく、ここがその住所ですよと運転手に言われて薄汚れた路地におりたとき、雨がふりはじめた。

電信柱に住所を示す青い表示板が貼つてある。確かにそこはメモに記された場所だった。コーナーを曲がると目の前に出現した三階建を見上げて立ちつくした。錆だらけの鉄階段が上まで伸びている。陰気なグレーの塗装はだらしく剥離し、縦横に割れたモルタル壁は今にも崩れそうだった。

手紙に記されたアパートの部屋番号を目で追いかけて、それが一階の奥にあることを確かめた。玄関付近はせり出した階段で影ができていて、春の太陽から見放されたように

電車の中は部活にむかう野球少年たちのさわがしく話す声がとびかっている。誰もがクチャクチャと耳障りな音をたてているのが腹立たしい。他人がガムを噛む音をこんなにわずらわしく感じたことはなかった。耳をふさぎたい衝動にかられたが黙って目をとじた。

レールをすべる金属音に想いを集中させてみた。しかし、その行為はかえって気持ち逆立てる結果となった。耳をつく不協和音の中には夫の悲痛ともいえる声が残っている。たまらず目を開けると、車窓を乱雑に通り過ぎる都会の残影に、子どもたちの怯えたような顔が点描のように映った。やがて大きな駅舎に入り大勢の乗客が入れ替わった。待ち時間は一〇分だという。家に戻ろうと思えば下りるチャンスはある。だが、どうにも引き返せない力が心をとらえて離さなかった。私は瞑目したまま時間が過ぎるにまかせた。意識が遠のき、寝不足の頭が睡眠と覚醒の中間を漂っていた。途中なんども不快な吐き気を感じたが、じつと我慢して膝に手をおいたままの姿勢でかたまっていた。

札幌駅でおりにから手洗いにいった。そこであらためて自分の格好に驚いた。まったく化粧もしないままジーンズにウォーキング用のジャケットとつばの小さなキャップをかぶった様子は、三十八歳と言う実年齢より十歳は老けて見えた。

少し大きめのシオルダーバックには着替えや化粧道具の暗かった。もういちどメモを照らし合わせてみる。間違はなくここだと自分に言った。

いぶかしげな視線を隣に住む老婆がとぼしてきた。半分だけ開けられたサッシの闕に腰かけて猫にエサをやりはじめた。長いこと洗濯していないように見える皺だらけの着物は建物と似合っている。片方の目が痛々しく閉じられている。開いた方の眼は二倍の怨念を込めたような眼差しだった。

私はおじけづいた。そこから退いて、道路の反対側にある生い茂るプラタナスの葉影に身を隠し、老婆の姿が見えなくなるまで待っていた。アスファルトに落ちる雫を見つめ、葉を打つ雨音を聴きながら、変わってしまった一年を思い出した。

それは、ふとしたきっかけで降ってわいた変化だった。そのころの私は日常生活の単調なくりかえしによって閉塞感におちいっていた。何をしても熱心になれず、明らかに集中力が失われていた。

分不相応なマンションに住むことを望んだ夫や子どもにも押しまくられるように首を縦にふった私は全時間働く仕事につくことを余儀なくされたが、家に帰れば家事のいっさいを抜きなくするよう求められた。

夫は職場の同僚にすすめられるままに、実にまめにゴル

フや飲み会に出かけていく。それでいて家にいるときは右の物を左に移すこともしない。何もかもを疲れきった私にさせるのだった。そんなおり、夫が近くに住む自分の父親の介護を全面的に依頼してきたとき、私は限界をこえた荷の重さに打ちのめされそうだった。

動物園がある旭山に空を染めるような桜が咲きはじめても何の感動も得られなかった。季節の移り変わりが興味のない映画のようにただ過ぎ去っていく。集中力が欠け、物忘れに悩まされ、情性という川の中でもがき、やっと水から顔を出して息をしていた。

市内のホテルで大学時代の同窓会があったのはそんな精神状態のときだった。家から離れていられる口実をさがしていた私は出かけることにした。大勢と会話をかわす気にはならなかったが、気心の知れた唯一の人物を会場にさがした。

そのとき、私はふとした話の中で自分の体調にふれた。家庭の状況に関する話題は極力さけるようにした。話し相手は旭川の大病院で外科医をしているS子である。

彼女とは大学時代は共に文芸サークルに加わっていた。私は手あたりしだいに本を読むことが好きだったが、S子は自作の詩をこしらえて学生新聞に発表していた。そばかすが顔の中心に胡椒をふったような模様をつくり、色気のない黒ぶちメガネをかけている。まっすぐな髪をゴムで無

造作に束ねたスタイルは昔と変わらない。骨ばった痩せぎすな体からは、今にもかび臭い医学書の匂いがしてきそう

だ。
カシスソーダを飲みながら、最近は何歳かの物忘れがひどくなって困るとい話をした。S子は、お互いにまだ四十前ではないかと笑った。私は日ごろの状況に軽く触れた。

「何かひとつをしようとするでしょう。例えば新聞をとり郵便受けに向かうとするわね。途中で洗濯機が目に入り、ああ、今日じゅうにアレを洗わないと。そう考えて洗濯機のカバーを開ける。するともう新聞のことはけろりと忘れてるの」

「気にすることはしないでしょ。その程度のことなら誰でもあることだわ。あなたは昔から、わりとそっかしかつたじゃない」

S子はソファーに反り返って朗らかに笑った。

「でも、やっぱり心配なの」と私は言った。「あまりにも多いと気になる。先週なんて娘を連れてショッピングに行ったのだけど、車で家についてから娘を捜したの。はっと思えば返したら娘を店においてきたことに気づいて慌てて引き返したのよ」

S子の笑いは苦笑に変わった。
「車に乗るときにも気づかなかったわけね」

冗談ではすまないと思ったのだろうか、S子は足を組みかえて上体を起こし真剣な眼差しになった。

「それで、どうなったの？」

「娘は何事もなかったように本屋で立ち読みしていたから困ったことにはならなかったけれど、今年になってから何度も似たようなことがあるの。小さなことも含めると毎日よ。こんなのは医学的に見てどうなのかしら」

「なるほどね」とS子は言って眉をしかめメガネをなおした。「毎日とは確かに頻度が多いわね。でも、今なら訓練によってかなり直るわよ」

「ほんとなの？」と私は聞いた。「あれでしょう。脳の海馬とかを訓練すればいいわけでしょう？」

「海馬は永続的な記憶と関わりがあるけれど、いま奈美が言ったようなのは前頭葉の訓練が必要なのよ」

「どこが違うの？ 私は脳のことがさっぱり分からない」

「そうね」とS子は姿勢をただし、急に医者者の表情になった。「日常生活のほとんどはすぐに忘れてもいい事の繰り返しといえるわね。いっどこで何を食べたかとか、トイレに何回いったかなんて、いちいち覚えていないでしょう。そんな日常生活に前頭葉が深く関わってくる。でも働きが鈍くなると支障が生じるのも確かね」

「それを訓練できるというの？」

「可能よ。それもけっして難しい方法ではないの。私の同

僚が来週に無料のセミナーを開くから参加してみたらどう

ためになると思うわ」
「そうね、行ってみようかな。亡くなった母が六十代で認知症になったから心配なのよ」

S子は自分の名刺の裏にセミナーが行われる場所や日付をメモして渡してくれた。

こうして私は病院のサロンで開かれた三時間のセミナーに参加した。短い文章を書いた紙を見せられ、キーワードだけを記憶に留める訓練や、さまざまな人物の顔と職業を覚え込む練習などをした。こんなことで脳の訓練になるだろうかと考えたが、これがどうして、教わったことを毎日続けていたら、いちじるしく記憶が強められ物忘れが少なくなつた。礼をひとこと言いたくて昼休みにS子の携帯に電話をいれた。

「このあいだは良いアドバイスをありがとう。参加してき

たわよ、セミナーに」
「ええ、聞いたわ。及川さんが真剣に耳を傾けていたと同僚が話していた。質疑応答の時間にも活発に質問したそうね。それでその後はどうなの、少しは効果があった？」

「おかげさまで効果抜群よ。驚いたわ。あんなに簡単な方法で脳を訓練できるなんて、早くからやればよかった。最近の食事の内容や出会った人たち、見たテレビ番組の内容までスラスラと言えるの。これには家族も驚いていた」

S子から持続の必要性を強調されて話をおえた。そんなある日、警察から一枚のハガキが来た。車を運転する誰もが受け取る免許の書き換えに関する知らせだった。数日後、私はもよりの警察署に行った。手続きに及ぼうとしたが、窓口は大入り満員の安売り店のように行列ができていた。もつと空いた時間に来るべきだった。そう思ってロビーに出た。ふと壁に目をやると、指名手配の写真がある。八名ほどが写っていたが、見ると懸賞金がついたものも少なくないようだ。ある女には二百万円、別の男には五百万もの大金がかけられていた。

人によって値段が違うのがどこかおかしかった。犯罪の重要度や社会的な影響が金額に影響を与えるであろうことは理解できる。子どものころに見た西部劇が頭をよぎった。懸賞金を目当てにして、銃一丁で命をかける男たちの話が現実味をおびて思い出された。

以前に何かの番組で見たことがあった。人の顔や体型は年齢とともに大きく変わる。髪の色が変わり、皺やシミが増え、避けえない老醜が増し加わっていく。背中が曲がることもあれば太ったり痩せたりもする。だが、目、鼻、口、この三か所を囲む狭い範囲は整形形でもしないかぎり変化しづらいのだと番組に出た元刑事は語っていた。

私は窓口の行列が少なくなるまでの時間を、所在なくボスターを見ながらすごした。重罪を犯した者の顔には、どグモールだった。私は何度も現場と会社を往復して書類を届けていた。現場では杭打ちと基礎にコンクリートを流し込む工事が終わり、本格的な鉄骨の組み立てが始まっていた。

現場にいくたびに設計図を片手に進捗状況をチェックし、予定通りに作業がすすんでいるかを会社に知らせる。多い時は一日に五回も足を運ぶことがある。猛暑に悩まされた夏も盆を過ぎてから急に涼しくなっていた。九月中に鉄骨工事を完成させ十月には外壁を仕上げる予定になっている。工事現場では長雨の影響で遅れぎみの作業を叱咤する現場監督の罵声がとびかっていた。

その日、会社の帰りに明日必要になる新しい図面を届けるとき、時刻は七時をまわっていた。辺りはもう暗く、その日の作業も終わって現場はひっそりと静まりかえっていた。細い通路を抜けて大通りに出ようとしていたとき声がした。ふりむいても人がいない。資材の山と道具を入れたコンテナが幾つかあるだけだった。

足を止めて耳をすますと鉄板を叩く音がする。「そこに誰がいる？」という低くくぐもった声があった。私は恐怖を覚えたが、同時に事態を確かめたくてコンテナに近寄った。どうやら声は中から聴こえるようだった。

「どなたか中にいるのですか？」
「そうです、開けてくれませんか」

こか共通のハクのようなものがあつた。屈託ない笑顔の写真もあるが、見る者のイメージにわき起こる血なまぐささが映像の後ろから迫っているようだった。

気がつくとも免許更新の列には数人を残すまでになっていた。手続きを済ませて家についたとき、辺りは夕暮れに包まれ、石狩川からたちこめる川霧が遊歩道に漂っていた。

私は二二歳のとき地元の大学を卒業してから中堅の設計事務所勤めた。高校時代に美術部に在籍して街の風景を好んで描いていたせいか、建物のもつ美に関心を持つようになり、大学では建築工学を学んだ。成績はふるわなかったが、就職先に設計事務所を選んだのも自然な流れだった。勤めてから三年目に二級建築士の免許を取得したが、友人の紹介で知り合った経理マンの及川健介と結婚し、妊娠出産をおりに退職して二人の子どもの母になった。八年のブランクのあと、夫の強い要望もあって再び職場に再び咲いた。良い家に住み、高級な車を持つことを夫は成功のパロメーターだと思っているようだった。

会社には二人の一級建築士を含む十五人が勤めている。市内にある中規模のマンションを得意とし、ときおり店舗や一般住宅も手がけている。

あの人と出会うことになったころ、会社もつとも力を入れていたのは駅裏を再開発して建てる中型のショッピン
開閉用のハンドルを回し重い扉を開けると、暗い中で男がうずくまっていた。私は扉を大きく開けて作業現場を照らす夜灯の光を入れた。男の顔には殴られたようなあとがある。手に持ったヘルメットはまぎれもなく作業員が被るものだった。

「どうしたのです？ まさかケンカをしたのではないでしょうね」
「ぶつけただけです」

といて男はあわててヘルメットを深くかぶった。
「どうしてコンテナの中に？」

「中で休んでいたら鍵を閉められてしまつて。このことは現場監督に言わないでくれませんか。寝ていたのがばれたらクビになってしまいますから」

男はそう言う頭を下げて足早に立ち去つた。
私は帰宅のためにバス停にむかったが、男の言うことが腑に落ちなかった。作業中に寝ていられるほど現場は甘くない。何かのことで意図的に閉じ込められたのではないだろうか。このことは上司に報告すべきだと思つたが、黙っていてほしいという男の懇願するような目が心にひっかかった。

結局は言えないまま何日が過ぎた。同じようなことがあれば今度は黙っているわけにはいかない。気になったので用事を済ませたあと、あえて作業現場に近づいた。

明るいとときに見た男は無造作に髭をはやしているが、どこかに品の良い雰囲気を持っている。ただ、ヘルメットのつばが目もとまで落ちていたので顔立ちが判然としない。私が近寄ったとき、男はあのとときの人だと気づいたのか、顔を上げて恥ずかしそうに微笑した。

つられて笑いかけたが、その直後、私の心に戦慄が走った。あの顔、あの目には見覚えがある。半年前にセミナーを受講し、日常生活で前頭葉の訓練を続けていたせいとか、私の記憶力はいちじるしく改善されていたのかもしれない。まさか、まさか、という言葉を連発しながら、そこを立ち去ってからも遠くから観察した。

男は三十代のなかばくらいで、背が高く蒼白い顔をしていた。目は二重で鼻筋が通った賢そうな顔だ。それはまさに四か月ほど前に警察署のポスターで見た人物の特徴をそなえていた。

事務所に戻ってからパソコンを検索した。指名手配犯の写真が画面に現れたとき、私は確信を強めた。午後からもういちど現場に行く用事がある。ひとりの人物の顔の三角点を頭にたたきこんだ。

さりげない素振りでも再び近くを通ってみる。その日から誰にも知られないように注意を払って何度も男を観察した。男からは家庭の匂いらしきものが感じられない。彫の深い顔立ちには不健康そうな影があった。

私は窓辺を離れた。この女には軽はずみに話すわけにはいかなかった。それ以上質問されることを避けるように、わざと忙しく図面に目をおとしたが、実際の心はそこになかった。呼吸は荒くなり、心臓が飛び出そうなほどに動悸を打っていたのだ。

あの人が七年前に札幌で金融会社の社長を撲殺した犯人なのだろうか。あの独特の暗い影は、男がただ者でないことを物語っている気がする。鉄骨組み立て作業はあと十日ほどで終わってしまう。急がなければ再び手の届かない都会の混沌に入りこんでしまうだろう。

会社に帰ってから、周りに誰もいないことを確かめて、社長がいつもいる控室のドアをたたいた。そこは社長室と呼べるほど立派な部屋ではない。応接室を兼ねた八畳ほどの殺風景な部屋だったが、パソコンや電話が設置されている。自分の感じたことをどのように社長に告げようか、ためらっている。

「何か困ったことでも起きたのか？」

社長はでっぴりと太った体をもてあますようにダミ声で言った。気になる男のことを一気に話すと、社長はソファから立ち上がり、冗談だろうと叫んだ。

私は直立不動の姿勢で首をふった。

「ほんとなのか？」

社長は前へ進み出て聞きかえした。

男はいつもクレールが吊り下ろした鉄骨をボルトで止めるグループに加わっていた。真剣に作業に打ち込んではいないが、その視線には何か別なものを見ているような気配を感じる。他の作業員との明確な違いが何なのか分からなかったが、流れ者にありがちな不遜さを隠しているようにも見える。周りの作業員と会話を交わしている様子もなく、ただ黙々と仕事をこなし、ときどき周囲を鋭い目で見ることがある。その視線がこちらに飛んできたとき、現場事務所の窓から注視していた私はおもわず足が震えた。

「及川さん、何を見ているの？」

うしろから声がした。口が軽いことで有名な主婦の事務員だった。ふりむくと、太ったあごを両手にのせて机にひじをつき暇そうにしている。

「別に何でもないです」と私は答えた。「このごろ作業の進むのが早いなと思って見ていたの。来年の夏には何千人もの人が、この建物にあふれるのだろうと思ってるね」

「それにしても、怖い顔をして作業員を見ていたわよ。誰か都合の悪い人でもいるんでしょう？もしかして別れた男の人とか」

事務員は、さも詮索好きといった上目からずるような光を飛ばして笑った。

「相変わらず想像力がたくましいですね。そんなんじゃないりませんよ」

「ほんとです。どうかご自分の眼で確かめてください」

社長は禿げた頭をずんぐりとした指で掻きながら、このあいだの私と同じように、まさかという言葉を連発した。

「及川君、もしそうだとしたら慎重に事を運ばねばならないぞ」

社長は声をひそめた。私はすぐにパソコンを開いて指名手配犯の顔を画面にだし、社長この人ですと言った。

「ひえー、五百万の懸賞金がかかっているじゃないか」

「そうなんです」

社長は表示されている犯罪歴を読んだあと、みるみる怖い顔になり、胸ポケットからタバコを出して吸い始めた。思案しながら落ち着きなく頭を上下させている。口もとにもっていった指が煙にまじって震えているように見えた。図体や太い声とはうらはらに幽霊の話を怖がり、ドラマを見てすぐにもらい泣きするデリケートな部分がある。その社長が決然と胸をはり、

「よし見に行こう」と言った。「この写真をプリントしてくれないか」

私は映像をクリックしてプリンターを起動させた。乾いた音が不安をかきたてる。社長は受け取った手配写真にじっくりと目を落としたあと、意味ありげにうなずいて背広の胸ポケットに入れた。

「このことは誰にも言ってはならんぞ」

もちろんですと私は答えた。

午後の作業がはじまる時間に合わせて社長は私をともなつて現場を訪れた。二人はいつものように作業事務所には寄らずに、男が働いているという鉄骨組み立て現場を足場の陰からさりげなく観察し、写真と比べた。午後の陽ざしを受けた男の顔にできた影が濃さをまし、いっそう痩せて骨ばって見えた。

「及川君、あれは違う人物ではないだろうか。輪郭がまるで別人に見えるぞ。君の思い過ごしではないのか？」

「ですが社長、どうかよく見て下さい。体型や顔の輪郭は七年で相当変化していても不思議ではありません。肝心なのは目と鼻と口を結ぶ三角点です。そこは変化しにくいと言われています」

社長は、ほうーと感心したような上目で私を見たが、メガネをかけ替えて再び男を凝視したあと、突然低くうなり声をあげた。

「なるほど、君のいうとおりだ。無精髭を生やしてはいるがこうして顔の周辺を隠すとあの男によく似ている。だが、どうしたらいいものかな、もし違ったらどうしよう。及川君、このことは明日まで内密にしておいてもらえないか」

「それはいけません、一刻を争うと思います。違っていたらそれで結構ではありませんか。気づかれたらおしまいで

すぐに状況を説明した。刑事はすぐに指示を与え、何か所かの逃げ道をふさぐ手配をしているようだった。

刑事たちを案内し、資材の陰から男を指し示した。彼らは写真と男を比較して互いに目でうなずきあっている。刑事は私と社長に向かって大きく首を縦にふった。どうやら写真の男に間違いなからうという合図に思えた。

それからの十分間は映画のロケ現場を見ているようだった。男が激しく抵抗し、警官たちに押さえこまれている様子が現実のものとは思えなかった。取り押さえようとすると警官の怒声、もがき抵抗する男の息づかい、入り乱れる靴の擦音が交錯する。そのとき警官に捕えられた男が振り向きざまに私を見た。一瞬の視線の邂逅だったが、何ともいえないやるせない眼差しが脳髓に突き刺さってきた。

男がパトカーに乗せられてから、そばにいた刑事が言った。

「いやはやお手柄でしたな。本人は否認していますが間違いないだろうと思います。あの激しい抵抗ぶりが何よりの証拠ですよ」

このあと警察署に御足労願いたいと告げて刑事たちは現場を立ち去った。

その日の夕方のニュースは、七年前に起きた札幌の金融業者殺害事件の容疑者である高木義明が捕まったといっせ

す。警察もいきなりお前が犯人だろうとは訊かないと思いません」

「よし分かった。もしそうなら大変なお手柄だ。今から警察に知らせることにするか」

「その方がよろしいと思います」

私は目上の人に対して毅然として言った。何だか自分が敏腕探偵になったような気分だった。

「君が電話しなさい」

「私ですか」

「そうだ。今回の指名手配には懸賞金がかかっている。君が通報するべきだ」

ふだんは何かとお金にケチな社長が冷徹なほどに清廉な人間に映った。私はあらためて高額の懸賞金を耳にして口中に唾液が溜まった。山積みされている資材に隠れて警察に電話を入れてあるあいだ、社長は男から目を離さないように鋭い視線を投げかけていた。

電話に出た警官は、その慌て振りが目に見えるようだった。私はひき続き社長に見張りを頼んで表通りに出た。十分足らずでパトカーが三台やってきた。サイレンをならさず停車し、パントマイムでも見ているように音をたてずに警官たちはおりにきた。

通行人が何事かといった顔つきでいっせいにこちらを見た。捜査一課の手帳を見せた三人の刑事がそばにきたので

いに報じた。取材は容疑者の家族にまで及び、長沼で野菜農家を営んでいる実家が映しだされた。

そこには高木容疑者の兄夫婦と母親が住んでいた。兄夫婦はインターフォン越しに断固とした口調で取材を拒否したが、庭にいて報道陣をふり切れなかった年老いた母親が泣き腫らした目で地面を見つめている様子がテレビに映し出された。記者たちの質問にもいっさい答えず、背中をいっそう丸めた母親は、けっして顔をあげようとしなかった。そのおどおどとした、葉裏に隠れた蝸牛みたいな姿は三年前に亡くなった私の母親にどことなく似ていて、わきあがってきた痛々しい思いを倍加させた。

それからというもの、家には電話がひっきりなしにきた。警察は一市民からの通報によってと発表したにもかかわらず、及川奈美という名前がどこからもれてしまい、週刊誌や地元の新聞には実名が載ったのだった。

まもなく警察署に呼び出しがあり、懸賞金の授与式が行われた。地元の警察署長をはじめ何十人もの警察官が祝福の拍手をした。一週間後に現金五百万円が口座に振り込まれた。十年間働いてやっと貯められるかどうかという大金が一夜にしてふつてきたのだった。

出会う誰もが口々におめでとうと言った。こんなことは、十五年前に結婚したとき以来聞かない祝福だった。親せき

や友人たちは賞金の使い道をあれこれ詮索した。札幌で証券会社に勤めている義兄からは、有利な株があるから買ってみないかと真面目に勧誘してくるしまつだった。

しかし間もなく私の高揚感を打ちのめすことが起きた。高木義明の母親が農薬を飲んで自殺したという報道がながれたのだ。私はなんとも複雑な思いを抱いた。自分の母親に似た老婆が、息子のことで世間にさらされ、絶望のうちに死んでいったのだ。

もとより息子が事件を起こしたのは七年前であるから、こうした取材が初めてではなかったかもしれない。しかし今回の一連の報道は、たまたま他に事件がなく、ニュースになる種が希薄だったというタイミングで暇な取材陣が殺到したという条件が重なったのかもしれない。いずれにしても、そのきっかけを作ったのが私であったという事実は動かせない。

漠然とした不安にかられたせいも、銀行に入れた懸賞金を使う気になれなかった。このあいだまで描いていた計画は急に色あせて、濁った水に沈んでいった。

まもなく高木義明の本格的な取り調べが行われたが、報道によれば本人は一貫して容疑を否認しているとのことだった。しかし、殺された金融業者の家を犯行時間近くに訪ねていたことは裏に住む住人に目撃されていたことと、当夜盗まれたのとはほぼ同じ金額の金が高木のアパートから

た水彩画と巨大な鉄橋の油絵が二枚あった。

翌月になって決定的な出来事があった。函館でATMを強奪しようとした犯人が、逮捕されてから札幌の金融業者殺害をほめかす供述を始めたのだ。やがて、高木義明に關する事件はあらゆる洗い直しが行われ、まもなく検察側が起訴そのものを取り下げるに及んだ。

その日から私のさらなる苦悩が始まった。高木の母親の命は帰らないのだ。息子の逮捕に悲觀し、マスコミに追いつ回されて精神的に追いつめられた老母が選んだ道は取り返しがつかない悲劇としか言いようがなかった。

私はまず懸賞金を返そうと思立った。そのためには家族を説得する必要がある。半分のお金は貯金し、残りのお金で古い車を買ひ替え、小学六年の娘にはパソコンを、三年生の息子には新しいグロブとバットを買ってあげる約束をしていた。

朝起きて、さっそく自分の考えを話すと、夫は気でも狂ったのかと言わんばかりの罵声をあげせ、懸賞金の取り消しなどあるはずはない。おまえはバカかと罵られた。息子は鼻をならして不平を訴え、娘は半べんをかきながら学校へ行った。

健介が言うとおりの、警察では懸賞金の取り消しはないと言われた。私の苦しみは増すばかりで、仕事にも集中でき

押収されたという事実がある。

しかし高木本人は、その金は自分のアトリエを訪れた見知らぬ老人が三枚の絵と引き換えに置いて行ったものなのだと主張した。自分は溜まっていた借金を返そうとして訪ねたが留守だったと高木は説明した。しかし名前も住所も分からない売買話を警察は全く信憑性のないものとして退けた。ある週刊誌はむかし世間をさわがせた帝銀事件の容疑者にふれて、幻の絵画購入者の話を面白おかしく書いた。

裁判は一番において高木容疑者に懲役二十年が言い渡された。減刑の理由として裁判官が考慮したのは金融業者の日ごろから知られている悪辣な商売の仕方と有無を言わずぬ取り立て姿勢だった。その無情なやりかたは借主との間で頻繁にトラブルを巻き起こしていたようで、自殺者が何人かいることが明らかにされた。そうしたやりかたが被告を精神的に追いつめる結果になったであろうとされた。

しかし、弁護側が控訴の手続きに入ったところに事件は重大な進展をみた。高木青年から絵を買ひ求めたという老人が名乗り出たのだ。

老人は札幌にいる娘のもとに三か月に一度ほど訪れるが、ふだんはトマムの山奥でテレビも新聞もない、いわば世間から隔絶された環境で独居生活を送っていた。そのため、遊びに来た孫に知らされるまで事件そのものを知らなかったのだ。老人の家には高木の作品に違いない石狩川を描い

ず、家庭に帰ってからも自分が自分でないような日々が続いた。

贖うすべもなく、すっかり消沈していた私はどうにもならない心の沈殿物を取り去りたくて友人に電話した。

話をきいたS子は言った。

「それは奈美のせいではないでしょう。あなたは一市民としての義務を果たしたにすぎないのだから」

自分から相談をもちかけていながら、私は受話器のむこうから聴こえてくるS子の言葉が脳を素通りしているように感じられた。

私の中に積もった罪悪感の日を追うごとにますます腐臭をともなつて心を埋め尽くした。それは自分でも分かるほど病的なものだった。

その罪悪感、捕まった高木義明に対してというよりも、自殺してしまった母親に対するものだったかもしれない。週刊誌の報道によれば、高木は昔から孝行息子で知られていたという。彼が七年間逃げまわっていたことには解せない部分があるが、自分が通報しなければ今回の一連の出来事は誘発されなかつたはずなのだ。

真夜中に私は窓辺に立った。冷え込みが一段と進んでいる。窓ガラスに複雑な霜模様がついている。月が煌々と照らす雪景色は怪しいまでの惻愴な世界を表出していた。ガウンを引き寄せ、冷えた軀を隙間なく締め付ける。どこか

から大地を裂くような、スコーンという鈍い響きが聴こえてくる。

それは毎年、冬のいちばん寒い時期に起きる現象だ。ここに移ってきて三年になるが、初めのころは、その不気味な響きに恐れおののいたものだった。誰もいるはずがない森から聴こえる獣みたいな唸り音が凍裂であることを知ったのは翌年になってからだ。マイナス二十度を超える外気は生きている樹木さえ引き裂く力を有している。

しかし、今日のそれは、自分をとりまく外面世界で起きているように思えなかった。まるで私の内部で起きているようだった。私の中の何かが凍りつき破裂しているに違いないのだと感じた。ガラスの霜に手のひらを当て、滴り落ちる水の跡を見ながら自分の前途に横たわるものに恐れおののいていた。

私はどうとう耐えきれず、周りの誰もが驚く大胆な行動に出た。釈放された高木義明が今現在どのような生活を送っているか、どうしても確かめずにはいられなくなったのだ。図書館にでかけ、長沼の電話帳を調べて高木の母親が住んでいた住所に手紙を出したのは一月の終りだった。期せずして二週間後に返事が届いた。それは高木本人からのものだった。手紙に対する感謝が綴られており、すべては自分の不徳から生じたものであり、現実から逃げまわっていたのがいけなかったのだと書かれていた。それは

観や感性が驚くほど似ていることに私は感動すら覚えていた。

学生に戻ったような私に対して、夫はしばしば皮肉を口にしたが、父親の介護をまかせっきりにして、自分は気ままに遊んでいるという罪悪感からなのか、高木との文通をやめるようには言わなかった。

そのころ私は夫の影に女がいることを感じていた。どこへ行くにも片時も携帯電話を離さず、触れるだけで苛つき、誰かが覗こうものなら怒りをあらわにした。妙に下着にこだわり、香水を使い、不自然なほど体をきたえることに関心を示した。最近飲みはじめた栄養ドリンクが単なる疲労回復のためでないことはラベルの成分を注意深く読めば明らかだった。

だが、私は夫を追求する気力を失っていた。いや、失っていたのはもっと他のものに違いない。愛——果たしてそんなものが残っているだろうか。私は自分を納得させようとした。追求したところで、どうせ口のうまさや煙にまかれるに決まっている。昔から自分のあやまちをけつして認めない健介の性格をいやというほど味わってきたのだから。

だが私はたじろいだ。いつの間にか自分の肉体の内部に若い時のたぎりがよみがえっている気がしたからだ。ある日から、私は夢の中で遠くにいるはずの高木に抱かれていた。工事現場で会ったとき一度も再会していないのに、手

一貫して自らを責める内容だった。手紙の末尾にはコンテナに閉じ込められていたとき助けてくれてありがとうと書かれていた。封筒の住所は札幌の篠路になっていた。

その後、高木義明との文通がはじまった。私は誰かこうして手紙で語り合うという経験をもったことがなかった。いつの間にか彼からくる手紙を心待ちするようになった。

そのころ、私をとりまく現実はずっと重苦しいものとなっていた。忙しい仕事と、たえない家事に加えて義父の介護に土日を費やさねばならないのだ。健介の兄弟三人で分担するという話だが、いつも行かされるのは嫁の私で、健介は好きなゴルフに興じていたし、しばしば朝まで帰ってこない。その回数は確実にふえていた。それにくらべて、私には休日と呼べる日が一日もなかった。

健介は父親が近々書こうとしている遺書をしばしば話題に出した。公務員退職者の父親は堅実に蓄財をかさね、かなりの財産をもっていることは私もきいていた。健介は二男という立場だが、少しでも有利な分け前にあずかろうという浅ましさを隠そうともしなかった。今年の秋からわが家に引き取ろうと言いつ出したのも、そんな打算の延長だったのだ。

私は疲れきっていた。ただひとつ、心を癒してくれるのは高木からの手紙だった。そのころは互いの生い立ちや、身の回りの些細なできごとを書くようになっていた。価値紙で心の交流をしているうちに、知らずして彼のものになることを望んでいたのだ。

しかし、手紙の中では、そんな気配をおくびにも出さなかった。私は感じる風や季節や花への想いを詩にして書き送った。今まで本格的に詩を書いたことがない私だったが、高木のことを想うと、言葉がよどみなくあふれてくるのだった。

あるとき高木が手紙で言った。篠路からは石狩川が近いのです。そしてこの川はあなたが住む町とつながっています。雪がとけたら鉄橋をわたり、河畔の夕暮れを見に行きます。想像だけでもいいですから一緒に歩いてみて下さい。私は自分を抑えられなくなっていた。会いたかった。たまたまなく彼に会いたかった。その日の午後、私は懸賞金を入っていた口座からまとまったお金をおろし、荷物をつめた。家族が寝静まったあと、一睡もしないで朝が来るのを待ったのだった。ところが、私が着替えを終えて玄関で靴をはきかけたとき、

「こんなに早い時間にどこへいくのか」

という声があった。私は何も答えずに玄関ドアに手をかけた。その尋常でない様子から夫は何かを察知したに違いない。つい数日前も、高木からの手紙を握りしめたまま思いつめていた私を見てしまったからだ。

「いったいどうしたというのだ？」

私は何も答えられないまま帽子のつばを下げて床を見ていた。

「黙っていても分からんじゃないか。答えろよ」

「自由にさせてほしいの。お願い、空しいのよ、何もかも」
私はドアを開けて外の土間に足をかけたとき、夫は荒々しく肩をつかんだ。

「行く気なのか、あいつの所に？ いったいどうしたというのだ。それが何を意味するか分かってるのだろうか？」

私はふり切ってマンションの七階通路を歩きだした。夫はドアから半分だけパジャマ姿をのぞかせて立っていたが追いかけてくる様子はなかった。エレベーターのボタンを押す。一階から上がってくるワイヤーの回る音がして、ホールに溜まっていた冷たい空気が足もとから吹きだしてきた。私は無我夢中で駆けだしたかった。軀の中に何かが蓄積し、頂点に達しているのが分かる。それは私を動かす陰のエネルギーなのだ。それが内部で沸騰しつづであった。いつも通るエレベーターのドアは、今日にかぎって別の世界への入り口みたいだった。その鉄の扉が開いたとき、私の耳に厳寒の夜に空気を裂く、あの未知の獣のような破裂の咆哮が聴こえていた。

受賞の言葉

高岡 啓次郎

私は五四歳まで絵を描くことがおもな表現手段でした。しかし画作では表現できないことがあまりにも多いことを思い知らされます。グールモンが、世界中を旅行してあらゆる土地を知りつくした人でも自分の心の中を知ることができないという趣旨のことを述べているように、私もまた自分という最もやっかいで、一生つきあっているかねばならない不可思議な生き物に翻弄されていたわけで、人間存在の不条理に苦しみながら、答えが解らない悶々とした日々を送っていたわけです。三三年ぶりの父との再会と和解、そして一四年後の死別という出来事は、これを記録しておかねばという気持ちを起こさせました。それは『一日だけの長い旅』という作品となり、私の処女作となりました。九州で発行されている『海』に今年掲載していただきました。その次に書いたのは、まもなく地上から確実に消え去ってしまう母の波乱に満ちた生涯を記録することでした。遊



たかおかけいじろう

高岡啓次郎

- 1951 小樽市生まれ
小樽工業高校電気科卒業後札幌で電気関係の仕事につく
中学高校と美術部に所属し本格的な油絵に没頭する
71 苫小牧市に20歳で移転
苫小牧民報社勤務
77 26歳から建築関係の自営業をはじめ今にいたる
30代で詩作に挑戦する
54歳から父との33年ぶりの再会と死別をきっかけに小説を書き始める
- 苫小牧文学賞 佳作
月刊クオリティ北海道文学賞 佳作（現在連載中。1月から12月まで。『月光の影』280枚）
文芸思潮 エッセイ賞 佳作
北のエピソード 佳作



びに来るたびにインタビュして完成したのが六〇〇枚の『美唄川』でした。しかし、もともと私のおもな関心事は人間存在の不条理であり、自分が解らないということでした。ここ数年にわたって書いているものはどれも自分が解らなくなるという種類のものかもしれません。今回特別賞をいただいた『凍裂』という作品は旭川の近くに住む女性主人公ですが、真冬に大木が凍って破裂する自然現象が、ときとして人間の心の中に生じるということを書きたかったのです。私が目標としている短編小説はひとつの詩となり得る小説を書くことです。ル・クレジオの場合は長編ながら詩になっていきますが、私も文章ひとつひとつを熟慮し、言葉を紡ぎだし、詩になり得る短編小説を目ざしています。以前に書いたものを読み返すと未熟な点を発見することがあります。それに気づく点が多ければ多いほど進歩できたということになります。去年や今年に書いたものもそうなることでしょう。それを私は望んでさえいます。来年はさらにレベルを上げた小説を書きたいからです。